

〔資料・翻訳〕

エカリウス「J.S.ミルの経済学説への 一労働者の論駁」(Ⅱ)

天野 光則訳

X. 利潤

ミル氏はその利潤にかんする章を非常に狡猾な記述でもって始めている。「労賃が労働の報酬であるように、シーニア氏の適切な表現に従えば、資本家の利潤は節欲の当然の報酬である。それは、彼がその資本を自らの目的に使用するのをよして、生産的労働者をして彼らの目的のためにこれを使用することにたいする利得である。このような節欲にたいして彼は補償を必要とするのである。」(ミル『経済学原理』, 末永茂喜訳, 岩波文庫, 第2分冊, p.389.)

われわれは、慈善家、すなわち資本家が資本を蓄積するために、いかなる困難さと闘い、いかなる苦勞に遭遇し、苦難に耐えなければならないかということをすでに知っている。人は誘惑されることがなければ、慎んでいることは容易である。しかし資本家は、彼の資本をその目的のために使用することへの誘惑にたえずさらされており、彼自身の目的を省みないで、それをもって労働者が彼らのために使用できるようにという献身にたいしてそれ相当の補償をとにかく手にするのである。資本家階級は、労働者階級のためにできるだけ多く残そうと絶えず努めているのである。

ポーターの『国民の進歩』によると、火災のために保障されている財産は次の通りである。

1801年	2 億3224万2225ポンド・スターリング	
1811	3 億6670万4800	〃
1821	4 億803万7332	〃
1831	5 億2665万5332	〃
1841	6 億8153万9839	〃
1849	7 億5618万8900	〃

これらの数字は、いかに資本家たちが労働者たちにそれでもってしっかりと稼がせてやるべく彼らに多くの道具と原材料を調達してやるように心がけているとの証明と見なされるかもしれない。ポーターは個人的財産の価値総額を次のように見積もっている。

1814年	12億ポンド・スターリング	
1824	15億	〃
1834	18億	〃
1845	22億	〃

今日では、それは30億と見積もられている。

節欲的な民族はどれか、イギリスの資本家たちだ！50年ものあいだ自らの資本を自己の目的のために使用することを思いとどまり、しかもその間になお2億ポンド・スターリングも増やすために。そして労働者階級をして労働者の目的のためにすべてを使用することを許すために！労働者は彼のなしたことにたいして労賃に値するように、資本家は彼がしないことあるいは他人にさせることにたいして労賃に値するのである！

資本家の報酬が彼の節欲とともに増えることは自明のことである。ハインリヒ八世（1592年）の治下で一つの評価がなされたが、それによると、ロンドには年収400ポンド・スターリングを稼ぐ4人の商人がいた。チャーマーの見積によれば、1688年にはイギリスの大商人と大実業家2,000人は400ポンド・スターリングの平均所得をもち、それより小さい8,000人は200ポンド・スターリングの平均所得を、4万人の小売商人と手工業者は45ポンド・スターリングの平均所得をもった。これは言ってみれば、節欲の報酬がそれほど目立たなかったブルジョア社会の初期のことであった。その時以来、次の表が示すように、大きな変化が起こった。

イギリス

年代	商工業者の所得	人数
1688	4,400,000Pf.St.	50,000
1815	37,058,989 ♪	♪
1845	64,095,191 ♪	♪
1846	70,292,122 ♪	♪
1863	95,844,222 ♪	308,416
1864	105,435,787 ♪	332,431
1865	114,851,159 ♪	347,110

年代	1万－5万 Pf.St. の所得者数	総所得	平均所得
1846	319	5,672,827	17,783
1863	731	14,065,019	19,240
1864	866	16,478,075	19,024
1865	959	18,573,474	19,367

年代	5万 Pf.St.以上 の所得者数	総所得	平均所得
1846	16	1,198,842	74,302
1863	91	8,744,762	96,096
1864	107	11,077,238	103,525
1865	133	13,380,791	100,607

1万から5万ポンド・スターリングの価値を年々消費し尽くすか、あるいはさらに生産的労働を搾取するために準備するところの徒食者の所得が20年間で1万7,000から1万9,000ポンド・スターリングに増加したのにたいし、課税所得の最上級階級の所得は7万4,000から10万ポンド・スターリングに増大したこと、また第二流階級に属する人数が三倍になったのにたいして、もっとも富裕な徒食者の数は8倍になったことを、われわれは知っている。20年間に徒食者の年々の所得が増加

した5,076万968ポンド・スターリングのうち、2,508万2,596ポンド・スターリングが年々1万ポンド・スターリング以上を消費し尽くす徒食者に属する。生産的な無償労働の増加した超過分は次のように徒食者に分配される。

34万6,018人が2,567万8,372ポンド・スターリングを分け取り、

959人が1,290万647ポンド・スターリングを分け取り、

133人が1,218万1,949ポンド・スターリングを分け取る。

だから133人は他の959人と同じだけの節欲を行ったのであり、1,092人は他の34万6,000人と同じだけの節欲を行ったのである。節欲万歳だ！

ミル氏はさらに次のように言う、「通俗的な見解では、営業利益は価格に依存しているかのように現れる。生産者⁽¹¹⁾あるいは商人は、彼の商品をそれが費やした以上の貨幣で売ることによってその利潤を得るように見える。利潤は一般に売買の結果だと、人々は信じている。商品にたいする買手が存在するがためにのみ、生産者は儲けをえるのだと、思い込んでいる。利潤の原因は、労働がその維持に必要とする以上に生産することである。なぜ農業資本が利潤を生むかという理由は、人間の本質が生産のあいだに必要とする生産資料を超えて生活手段を産出することができるということにあるのである。利潤は交換の偶然から生れるのではなく、労働の生産性から発生するのであり、また土地の一般的利潤は交換が行われるかどうかに関係なく、つねに労働の生産性から発生するところのものである。事業の分割が存在しないならば、売買は行われなくてもいいが、利潤は存在するであろう。ある国の労働者が彼らの労賃よりも20パーセント以上多く生産するなら、価格があろうがなかろうが、利潤は20パーセントになるであろう。」（ミル、前掲訳、第2分冊、pp.409－410.）

通俗的な見解はその浅薄性においてこの哲学的な推論の深遠さを測り知ることはできない。ロンドの茶商人の利潤は中国人が彼自身消費する以上にお茶の葉を摘むことから発生するという確信をミル氏と分ちもつかわりに、通俗的な見解は、利潤

(11) アメリカの労働者たちはブルジョア経済学のこのような表現をすでに廃棄している。彼らは、彼らが名づけて生産者（producer）と呼ぶところの労働者と区別して、資本家を非生産者（non-producer）という表現をもって呼んでいる。このミルの「生産者」は製造業者であって百万長者であることがありうる。自ら何かを生産するかわりに、ただたんに他人の労働生産物の占有者であるだけである。

は例えば大商人が茶の葉 1 ツェントナーを90シリングで買って、それを100ないし110シリングで売ることから生じると思い込んでいる。だから昔オランダの商人たちは、彼らの香料取引での利潤は熱帯地方の農園における労働生産性からではなく、どれだけの価格でヨーロッパにおいてその香料を売ることができるかによると思いついていた。農園における労働が生産的であればあるほど、残りをそれだけ高い価格で売ることができるようにするために焼却した。1865年には1864年に比較して商工業の課税可能な所得は920万9,000ポンド・スターリングだけ増えた。そのうち426万6,000ポンド・スターリングはイギリスの人口の10分の1を占めるロンドンで発生し、312万3,000ポンド・スターリングはロンドンの人口の50分の1を占めるロンドン旧市街で発生した。ロンドン旧市街の営業は主として他の都市や地方の生産物を取引することにあるから、これらの利潤は売買に依存している。この利潤だけが課税可能な所得なのである。

ミル氏は、純粋な資本主義的諸関係の結果を純自然的な、資本主義的諸関係から独立した帰結として記述するという功績をもっている。農業利潤は人間の本質が自らの維持に必要とする以上の生活手段を産出することができることから発生するという彼の考察は、儲けがあたかも借地農と土地所有者が農業労働者の生産性にたいして、紅雀のごぼうにたいするのと同じ関係であるかのような無邪気な外観を与える。ごぼうはこの植物が死滅後に紅雀の餌となる数千の種粒を産出するという性質をもっている。ミル流の表現法にしたがえば、資本家の利潤をなすところの種粒は似たようなやり方で資本家的な紅雀の手に入るのである。ごぼうは繰り返し1,000の種粒を産出するので、999が利潤として紅雀の手に入る。農業労働者が繰り返し3クォーターの小麦を生産し、2クォーターが人間社会の紅雀である階級に流れる。ごぼうはその欲望をそれが産出する種粒とは関係なしに満足させるが、農業労働者は彼がその手作業で生産する種粒によって生活しなくてはならない。彼はいかなる自然的性質によってその維持に必要とする以上のものを生産するのであろうか。彼は、自身の欲望を満足させたあと、借地農になお利潤を生み出すために、朝早くから晩遅くまであくせく働くことを抵抗しがたい本能によってけしかけられるのか。人間の本質は、もし彼らが生産的労働者であるならば、資本家あるいは地主である人間の本質よりもその維持のためにより少なく必要とし、後者がより多く消費する

こと、また彼らが最大の緊張を持って生産する状態にあること、こうしたことがどうして起こるのか。われわれはこの謎を解き明かそう。

数年前借地農たちは、自由貿易価格のもとで利潤のでる農業が営まれうることを証明するために、彼らの貸借対照表を新聞紙上に発表することが流行した。ブライトン近郊にあるホウの借地農リグデンは、彼の750エーカーの農場について次のような計算を発表した。

	支出	収入
租税、肥料、種等々	1,529 Pf.St.	
地代	1,300 〃	
労賃	1,690 〃	6,460 Pf.St.
合計	4,519 Pf.St.	利潤 1,941 Pf.St.

この農場では平均54人の労働者が週12シリングでは働いている。彼らとその労働の生産物を相互に分配してしまうとすれば、各人は89ポンド・スターリングの価値を手にするであろう。賃労働者として彼らは彼らの労働生産物の価値よりも一人当たり57ポンド16シリング少ない31ポンド4シリングを彼らの労働の報酬として受け取る。超過分は借地農と地主の財布に流れ込んだ。地主たちの節欲の報酬はそれぞれ別々の労働者の生産的労働の報酬にくらべて42倍であり、借地農はその62倍であった。われわれが政府の報告から、今日ではイギリスの農業人口の3分の1は飢餓病を防ぐだけの栄養を与えられていないことを、知っている。したがって、利潤として借地農の手にはいる小麦の穀粒は、彼ら自身の欲望を超えた生産的労働の自然的な超過分ではなく、むしろ労働者が生産するものと資本家という社会的な勢力が労働者に自ら享受することを許しているところのものとのあいだの差額を表している。

この利潤作出の操作にかんするより詳細な考察にさいして、ミル氏の論調は一転する。資本家は彼の資本を自分の目的に使用するのではなく、すなわち享楽に費やすのではないという資本家の道学者ぶった「節欲」——それどころか、労働者をしてある償いを条件に彼ら独自の目的のために使用させることを許すための手段である——は、反対に、資本家自身の目的のために労働者を含めて生産的労働に使い尽くすための手段である。

その貨幣を機械、原材料等々に投下するミル流の節欲者は、それを享楽に費やす

かわりに、それを享楽手段から個人的貨殖手段に転化させる。しかし、利潤をあげようという彼の願望を実現するためには、彼が資本として所有している原材料を人間的諸能力の行使を必要とするある転化過程に置かれなくてはならない。資本家自身が必要とされる能力を行使するかどうかは、問題ではない。彼が資本家であるのは、彼がより多くの人間が同時にそれでもって作動することが必要であるほどに多量の生産手段を所有しているからである。だから他の人々をその活動範囲に引き入れることがどうしても必要なのである。これらの他の人々が、必要な能力を持っているが、それを実行する手段をもたないところの労働者である。だからわれわれは、一方には労働能力をもたない生産手段を、他方に生産手段をもたない労働能力をもっているのである。結合の手段として、生きていくためにはその労働能力の行使を売らなければならない労働者の飢餓が作用するのである。資本家はそれを——カール・マルクスが『資本論』で証明しているように——消費するために買うのである。しかし労働能力の行使は労働者と引き離せないのだから、彼は労働者をともに使い尽くすのである。

ミル氏がわれわれに信じ込ませようとしたように、資本の利潤は売買から独立しているのではなく、売買は資本主義的生産過程の絶対的な前提条件であることが明らかになる。ミル氏の「利潤は、労働者が、物価がいかにあろうとも、彼らの労賃より20パーセント多く生産すれば、20パーセントであるであろう」という主張は、五感を持った人間が自ら負うところのもっともばかげた同義反復である。労賃とは何か。労働の価格である。20パーセントの利潤はどこからくるのか。労働が価格をもち、その価格はその生産物の価値以下であるから。利潤を作るためには、資本家は彼の原材料に120ポンド・スターリングの価値を付加する労働を100ポンド・スターリングで買うことができなくてはならない。しかし生産物はまたその価値にしたがって売られなければならない、さもなければ控え目な20パーセントは実現されない。資本家によって充用される労働は交換価値あるいは商品を生産するが、その価格は労働の価格と同様に、その価値以下に下がることもある。何らかのある事情によって、需要が必要とする以上に生産されれば、そのときにはその価格は商品の価値以下にさがる。価格が20パーセント下がれば、そのときには利潤は流れ去ってしまう。したがって資本家的な節欲をねぎらうためには、第一には、労働者は彼の労働能力を、

そしてそれとともに自身を資本家に売り、消費させなければならない。第二に、労働者は彼の労働能力をその価値以下で売り、第三に、資本家は労働の生産物をその価値にしたがって売ることができなければならない。

われわれはなおしばらくミル氏の、生産的労働をして彼らの労賃を20パーセント超えて生産させるという慎重深さに留まろう。われわれはすでに、ホウの農業労働者たちが労賃の3倍近くを、つまりほとんど200パーセント多く生産することを考察した。オールドハムのサン・ミル——協同組合的工場——の労働者たちは昨年1万1,806ポンド・スターリングを労賃として手にしたが、2,007ポンド・スターリングが債権者に利子として支払われ、また組合員の配当は総計8,388ポンド・スターリングになった。チャーマーの計算によれば、1688年に労働者たちは546万ポンド・スターリングを、資本家たちは420万ポンド・スターリングを受け取った。レオニー・レヴィによれば、1865年に労働者たちは4億644万6,000ポンド・スターリングを、所有者たちは3億3,851万4,000ポンド・スターリングを受け取った。ダッドレイ・バクスターによれば、1867年に労働者たちは年労働収益の価値から4億596万5千ポンド・スターリングを、所有者たちは4億815万4,000ポンド・スターリングを受け取った。さらに付け加えておかなければならないことは、労働人口は全人口の6分の5をしめており、また年所得100ポンド・スターリングあるいはそれ以上の者のなかで、ほんの少数の者が大きな利潤をなしたということである。われわれは再び資本主義的蓄積の考察にさいして押えきれないところの結論に達するのである。つまり、プロレタリアートの搾取が基礎であり、またあらゆるものを生産している労働者の欠乏がブルジョア的富の実体である、と。

XI. 私有財産

ミル氏は資本の利潤を徳性の報酬として見なしたと同じように、ブルジョア的私有財産を所有者の勤勉によって獲得された財産と見なしている。彼は今日の社会の欠陥と不幸を十分に認めているが、それらが現存する所有方法の必然的な結果であることは否定する。その害悪の原因を機構それ自体に求めるかわりに、今日のおおいに不満足な、また恥ずべき状態を、ブルジョア的私有財産の機構が未だに自由

な活動領域を持っていないことから説明している。彼は言う、「あらゆるその不確かさをともなう共産主義と、あらゆる苦悩と不正とをともなう社会の現存状態のいずれを選ぶかと言うことが問題になるとすれば、労働収益が、われわれが今日目にしているように、労働とはほとんど逆比例して分配されることになっている——例えば、最大の分け前を手にしてしている人々はまったく働かず、その労働がほとんど名目的でしかない人々がそれに次ぐ分け前にありつき、労働が厳しく、また不快になるのに比例して報酬は少なくなり、ついにはもっとも過酷かつ消耗の激しい肉体労働も生活手段を稼ぐことさえあてにできなくなる——のは、私有財産制度の必然的な結果であるとするれば、この制度あるいは共産主義が二者択一であるとするならば、共産主義の大なり小なりのいっさいの困難さは天秤皿のうえの塵とおなじようにしか見えなくなるであろう。この比較を確かなものにするためには、われわれは共産主義のもっとも優れた面と、あるがままのそれではなく、作られえたかもしれない個人的所有の体制とを比較しなくてはならない。私有財産の原理はいずれの国においてもいまだ自由な活動領域を持ったことはなかった。」（ミル、前掲訳、第2分冊、pp.28-29.）

「個々人がある一つの職業あるいは制限された地域に拘束されることは必要ではない。人類の大多数の今日的な状態に比較して共産主義の諸制約は自由かもしれない。ここあるいは大部分の他の国々における労働者の大多数は彼らの職業あるいは移動の自由についてほんのわずかの選択しかできず、彼らは実際に決められた規律と他人の意志にほとんど従属しており、現実の奴隷制を別にして、彼らは何らかのある制度のもとにある他はない。」（同前、p.32.）

もっとも赤い共産主義者でも今日の社会状態についてこれ以上恐るべき光景を画くことはできないし、労働者と彼らの労働の果実を独占する所有者のあいだの社会的立場の対比をはっきりと引き立たせることはできない。それにもかかわらずミル氏は、この恐るべき状態は現存する所有諸関係の必然的な結果ではないと主張し、個人的所有制度をそれが現にあるところのものにしたがって評価するのではなく、それがありうるかもしれないところにしたがって評価すべきだと要求する。この忌まわしいことを根絶するために彼が提言していることは、最大の資産をいくらか小さくするために、不確かな期待をもって相続権の制限に限定することである。しかし

制度そのものを損なうことなしに、遂行されうるような最も例外的な制限自体が役に立たないであろう。仮に未来の世代に年収1万ポンド・スターリング以上をもたらすすべての財産が二分されるであろうような相続権の制限を導入する特殊な立法がなされたとしても、こうした措置は資本と賃労働の関係に多少なりとも変化をもたらすであろうか。否！問題になっているのは所有階級内部の財産の比較的均等な配分であって、今日の労働者と非労働者とのあいだの労働収益がいかに配分されるかという方法やあり方の全面的な改革ではない。唯一の救済手段は協同組合的生産である。生産手段が小数の所有者の手に集中すればするほど、われわれはより速やかに目的を達成する。もしもイギリス王国のすべての生産手段が6人の人物の私有財産であるとすれば、労働者問題は議会の訓令によって解決されるかもしれない。小規模の生産を不利にするいかなる発明も、生産手段のより大きな集中へのいかなる変動も、プロレタリアートの最終的な、かつ完全な解放への一歩前進である。生産手段が分散され、分割されていればいるほど、それだけ労働者は孤立させられており、またそれだけ問題の解決が困難である。仮にミル氏が魔法の一撃によって前世紀の企業経営の手工業的経営を再現できるとすれば、その時には協同組合的生産を成熟させるのにさらに100年を要するであろう。

ミル氏は次のように異議を申し立てる。つまり、近代ヨーロッパの社会的諸制度は、正当なる分配あるいは勤労による獲得の結果としてではなく、強力と略奪の結果であったところの財産の分配から出発した、と。しかしながら、私有財産の原理はどこで、どのようにしてそれがそれまであったところの自由な活動領域をもつべきであったのか、私には理解できない。かつてヨーロッパにおいて近代的ブルジョア的私有財産の幸せをもたらす影響が封建制度の残滓によっていかにして減殺されたかもしれないとはいえ、新しい世界では同様な障害を知らないのである。新たな世界において、文明は近代的な私有財産制度をもって始まった。そこには、近代的私有財産制度の自由な発展を妨げるところの克服すべき過去の障害も、世襲的偏見をともなった専制君主制も、土地貴族も、国教会も存在しなかった。新しい世界はヨーロッパの前衛部隊によって、旧世界のもっとも勇敢で、行動力のある、そしてもっとも進歩的な人々によって、旧世界の土着的な群れの気楽さをおとなしい卑屈さのなかで享樂し、解体過程にある封建制度の高官たちが台頭しつつある市民群へ

振りかざすこらしめの奴隸的卑屈さをもって順応することにかわって、原始林の中で遭遇する危険や辛苦に率先して進んでいった人々によって占有された。彼ら自身の考えにしたがって、つまり最新の私有財産様式にしたがって新しい世界を創造するために、彼らはほんの比較的少数の無防備の原住民を片付け、そしてこのような世界を建設した。そしてこの世界は旧世界と同じような癌に苦しまないであろうか。産業的貧窮は新しい世界では旧世界におけるほど土着的ではないであろうか。労働者たちは孤独な存在を生き延びるためにヨーロッパにおけるように死にいたるまであくせく働かされないであろうか。ミル氏が、そこから何か良いことが作り出されるかのような口実のもとで、ある制度がそれがあるがままに評価することを拒絶するのはなぜか。

ミル氏はさらに次のように言う、「私有財産制度は、その本質的要素に限定すれば、自己の労苦によって生産するか、あるいは贈与または強力や詐欺によらない合意によってそれを生産した人々から獲得したものにたいする各人の排他的な処分権の承認のなかに存する。だから、今日存在する制度は個人が生産しなかったものへの個人の所有権を承認していると、抗議することもできる。したがって、ある工場の労働者たちがすべての収益を彼らの労働と熟練によって産出するのだということもできる。それにもかかわらず、これらの収益は彼らに属するかわりに、法律はただ彼らに制限された労賃を与えるだけであり、労働の生産物をただその諸費用を提供するだけで、指揮監督によることさえなく、労働に自ら何らの寄与もしない者に認めるのである。これに対する回答は、労働はただ商品を生産するために結合されなければならない諸条件の一つだということである。労働は原料や道具なしには、ましてや商品を生産しているあいだ労働者を維持するためにあらかじめ調達された生活手段の貯蔵なくしては遂行されえない。すべてこれらの物は過去の労働の果実である。もし労働者たちが自ら所有しているならば、その時には彼はその生産物を誰かと分け合う必要はないであろう。しかし彼らがそれらを自ら所有していない限り、彼らはそれらを所有する人たちに対して両者に対する、つまり過去の労働に対しても、またその生産物を浪費するかわりにこの目的のために貯蔵する節欲に対しても、ある等価物を与えなければならない。だから所有権には契約による利得の自由が含まれているのである。各人が自らの生産したものにたいする権利は、この同

じ生産物の生産者が善意から譲渡したか、彼らが等価物と見なした何かと交換した
がゆえに、彼がそれらを自由な意志によって手に入れるとき、この物への権利を含
んでいる。彼らがこの点を妨害すると——それは彼ら自身の勤勉さの生産物への彼
らの所有権を侵すことになる。」(同前, p.46-48)

「強力あるいは詐欺によって獲得されたものは、財産として見なされるべきでは
ない。」(同前, p.50.)「所有の神聖ということが言われる場合、神聖さは土地所有
には同じ程度には服さないということを絶えず覚えておくべきである。土地をつくっ
た人間はいない。土地は全人類の本源的な相続財産である。その占有は完全に一般
的有用さの問題である。土地の私的所有が一般的な幸福に役立たないなら、それは
不正である。」(同前, p.74.)「国家は土地所有にかんして、社会の一般的利益が必
要とするであろうように、自由に処分できる自由をもっている。国家は、鉄道ある
いは新たな道路を敷設するための法案が通るたびに、部分的になされることを、全
体的に行うことができる。社会は土地の適度の耕作と農耕に結び付けられる諸条件
に非常に大きな関心をもっており、地主と呼ばれる人々の階級の思慮が信用に答え
るのに役立たないことが判明したさいには、これらのことを任せない。……われわ
れは、土地所有への私権は厳密に解釈されるべきであり、また疑義が生じた場合に
はいつでも土地所有者に反対して決定されることが原則だと考えている。この反対
は、動産と労働の生産物であるあらゆる物の場合である。これらに関して、他人に
対して積極的な損害を引き起こすような場合を例外として、所有者の権力は絶対的
であるべきである。しかし、土地にたいしては、それが積極的な善をもたらすこと
が証明されない場合、いかなる個人も排他的な権利を認められるべきではない。他
人の占有が排除されているのに、共同的な遺産の何らかの部分にたいする排他的な
権利は、一般にすでに問題となっている特権である。ある1人の人物が彼の労働に
よって獲得することのできる動産のいかなる量も、他人が同様の手段をもちいて同
じものを獲得することを妨げないが、土地を所有している者は他人をその享受から
排除しているということが問題の本質なのである。特権あるいは独占はたんに必然
的な害悪としてのみ弁護すべきであるが、それがもはや容認される善という代償が
続かなくなる点まで推進されると不正ということになる。」(同前, pp.76-77.)
「私有財産にかんするいかなる理性的理論において、土地所有者は決して土地所有

に寄宿する受祿聖職者以外であるべきでないということは意図されていなかった。」(同前, p.71.)「土地所有がこの基礎のうえにあったとすれば, 安定的であることをやめ, 新たな配置につくべき時代にきている。」(同前, p.74.)

ミル氏は諸刃の剣を弄んでいる。もし人間的労働が私有財産の神聖性を決める尺度として役立つべきだとすれば, 労働する人間はだれでも財産を獲得することができるという可能性は少なくとも存在しなくてはならない。彼がこのことをできないのは, 労働は可動的な私有財産の神聖性の標識ではなくなり, 自由な意志, 善意, そして等価は, あわれな逃げ口上となる。もし資本家的な所有者が賃労働者に等価——同等な価値——をその労働に与えるとすれば, 彼は他人の労働から何らの利益も引き出すことができないし, 彼は彼自身の労苦の産物を他の生産物を産出した労働と交換するだけであろう。労働者は財産を獲得する立場にあるかもしれない。このことはそれ自体ミル氏の本来の申し立てにしたがっても事実ではない。「もっとも多く手に入れる者はまったく働かないか, すくなくとも働く必要がなく, 最大の労苦をもって働く者はもっとも少ししか取得しない」——こうして働かない所有者が働く生産者に等価を与えるというわが哲学者の空中楼阁は崩壊する。同じように自由意志による合意と善意にはその固有の事情がある。ミル氏自身言っている, 人口の大部分はなんら自由な意志をもっておらず, 自らの運命を自分勝手に処理することができない。彼らの自由意志にもとづく合意, 彼らの善意は, だから境遇の強制によって指示された服従, 労働大衆として免れることのできない運命の定め以外の何ものでもない。それぞれが39ポンド・スターリングの報酬で89ポンド・スターリングの価値を生産している借地農リグデンの54人の労働者は, 借地農リグデンのために働くことを何らかの強制によって義務付けられてはいないが, 農業労働者の全階級は現存する所有者法によってリグデン達の全階級に彼らの労働をその価値以下で売ることを義務付けられているのである。これがミル氏の自由意志の合意であり, 善意である。都市の工場労働者たちが農村の農業労働者よりも良い状態にあるとしても, それは彼らの特殊な技能によるのでもなければ, 工場資本家の寛大さによるのでもなく, 彼らが農業労働者にくらべてより大規模に買われ, そしてより密集しており, そのために連絡し結合して行動し, そして孤立している農業労働者が自由に使えない強力を行使しうるからである。けれども彼らはその労働にたいして

何らの等価も手に入れていないし、平均して十分な労賃を手にしたことさえない。農業労働者の労働と同じように、彼らの生産力はただその搾取者のための私有財産を産出しているだけである。あらゆる愚鈍な者のなかの最大の間抜けでも今日では、労働することを強制されている人はだれでも通常は何らの財産も獲得せず、財産を獲得する人はだれでも働くことを強制されていないということを知っている。したがってより詳しく考察すると、可動的私有財産の神聖性にかんするミル氏の基礎は、神聖ならざる土地所有の基礎と同様に虫食いであることが判明する。

動産はいかにして生み出されるのか。われわれはその生産過程を追跡しよう。一人の中国人が蚕を飼育し、この昆虫が繁殖の促進のために紡いだ生糸をイングランドに送り、半ば飢餓に瀕したロンドンの絹織工がそれを絹布に転化する。オーストラリアの羊飼いが世話をしている羊から自然が彼らの被服として与えた羊毛を奪い取り、イギリスの工場労働者たちがこれを布地に転化する。アメリカの解放された黒人が綿花を栽培し、ランカシャーの女や子供がそれらを綿布に転化する。ロシアの農民が亜麻を栽培し、スコットランドの労働者がそれを亜麻布に転化する。そのうちにこれらのさまざまな物はロンドンの仕立屋の手に集まってきて、仕立屋は互いにそれらを結合し、シティ商人のための服に転化し、商人は等価物を与える。商人たちが等価物を与えるための手段をどのように手に入れるか、次のような事例が証明するであろう。しばらく前に、ロンドンのシティの富豪が亡くなった。その商売上手の証として、彼はかつて一挙に30万ポンド・スターリングを儲けたと噂されていた。フランス人がロシアへ侵入したさいに、彼は手に入れることのできるすべてのロシアの亜麻布を買占め、それらを貯蔵しておいた。その結果、亜麻布の価格は高騰した。あるすばらし朝、彼は彼の亜麻布を処分し、熱狂的な買い手を見出した。数時間後に、ロシア人がモスクワに火を放ち、フランス人が退却を準備しているとのニュースが伝えられた。この亜麻布商人は外務大臣よりも12時間早くこのニュースを入手していた。彼がその亜麻布を次の日にその価値でしか売ることができなかったとしたら、かれは30万ポンド・スターリング以上損をしていたであろう。この狡猾者は一挙にしてロンドン人好みの洋服3万着に相当する等価物を、つまり100人の熟練した労働者の生涯にわたる生産物の価値に等しいだけのものを獲得したのである。良心的な俗物は頭を振りながら、法律的には罰することができないとしても、

道徳的には弾劾に値することだと、抗議するかもしれない。しかし時々このようなやり方で一杯食わされている亜麻布工場の所有者は、日々そして時々刻々同じような詐欺を犯している。亜麻の買手は彼らが買った亜麻の価値よりも30万ポンド・スターリング多く与えなければならなかったし、自分の労働を工場主に売らなければならない労働者は彼らの労賃が値するよりもより多くの労働を遂行することを絶えず強制されている。年々10万ポンド・スターリング儲ける工場主は、彼が労働者たちに与えるよりも多くの、100人の熟練した手労働者に生涯にわたる労働生産物の価値実体に等しい額を丸3年で手に入れるのである。ロンドンの洋服には、世界の諸労働が体现されている。地球のさまざまな地域で材料を調達するためには、耕作のほかに、仕立屋の手に必要な形態に必要な原料が送られるためには、鉱山業、機械工業、造船業、鉄鋼業を必要としている。だからロンドン商人の洋服は自然的な、そして社会的な諸力の結合の結果なのである。商人がその洋服を手に入れるのは、彼が一度も針に糸を通したこともない被服工場の所有者に等価を与えたからである。被服工場主は彼の方で布地等々に等価を与えることによって諸材料を手に入れたのである。彼らの手の中ではさまざまな事情によって完成品あるいは原料からなる諸材料の所有者たちは、絶えず等価物を交換している。彼らの利得は、彼らが彼らの諸材料の価値を増加させる労働者に労賃としてより少ない価値を与えることのなかにある。洋服について当てはまることはあらゆる可動的な財貨に当てはまる。さて可動的な財貨の生産者は、所有者たちに彼らの所有である生産的労働を価値以下で売ることを強制されているのであるから、通常では何らの財産も獲得することができのだから、可動的な財貨にたいする所有権は他人の労働生産物の取得への権利だという結論に無条件にならざるをえない。可動的な私有財産の神聖性については以上である。

われわれは土地所有に転じよう。「いかなる人間も土地や地面を作ったものはいない」し、同じように、人間は蚕や羊をほんの少ししか作りはしない。自由な自然のなかに見出されるような地面と近代的な農地との関係は、蚕の生糸や羊の毛とロンドンっ子の舞踏服との関係と同じである。ある一つものは、別のあるものが人間労働によって作られたように、それらが現にあるところのものに人間労働によって作られた。文化発祥をなすところのナイル川、ヨルダン川、ガンジス川、インダス

川、ミシシッピー川等々の大河の岸辺でのみ、たいした準備作業なしに耕地に到達するところの堆積された土地の沈殿による大小の空隙がある。全体としてわれわれの今日の耕地は、可動的財貨と同じように、自然的な、そして社会的な諸力の結合の結果である。土地所有者は、労働者に等価物を与えることなしに資本家が彼の原材料に合体された他人労働を占有するのと同じように、彼の土地に合体された他人労働を占有する。資本家は地主と同じように、寄宿する聖職受祿者、徒食者であり、両者とも社会の寄食者である。

「ある人が自ら獲得しうる可動的財貨のいかなる量も、同じことをする他人を妨げることはない」という主張は、愚劣なナンセンスである。大衆はある一定量しか生産できない。平均量以上を取得する者は、平均面積以上の土地を所有している土地所有者と同様に他人を占有から排除する。少数者が富んでいるのは、多数者が貧しいからである。リチャード・ゴブデンはある労働者の集会の席で、労働者から工場主に出世した一人の友人を紹介した。この人は当時4千人の人々を雇っていた。

他の人が同じことをなしうるためには、原材料や機械だけでなく労働者数も倍加しなくてはならない。しかしミル氏の主張が正しいことを証明するためには、4千人のすべての人にとって工場所有者になるための十分な見通しがなければならなかった。だからわれわれは次のことがわかる。つまり、可動的私有財産は私的土地所有ほどにもすぐれた経済的理由も道徳的理由ももたない、と。両方とも、安定的であるためには中止する地点に到達している。時代はすでに、「一般的な幸福が新たな配置を必要としている」、そういう時代に入っている。

XII. 小規模農業

これまでの論文では、理論的説明と結論——消極的批判が問題であった。これから私はいわゆる実践的な部分、つまり積極的な諸提案の考察に移ろう。ミル氏がそれによってわれわれを抑圧している障害を排除し、近代社会のガンをいやすことを期待している諸方策と手段は、彼の理論的結論が誤っており、また矛盾しているのと同様に、不適當で、かつ非実践的であることがわかる。進歩的發展傾向を發展させ、社会的諸条件の変革を企てる代わりに、彼の救済手段は社会進歩に逆らう反動

的なものであり、停滞的状态、つまり資本主義的生産の永久化を意図された最終目標としていることがわかる。もし誰かが近代的な自動紡績機械にたいして旧式の糸引き車を、機械織機にたいして手織機を、鉄道輸送にたいして牛馬に引かせる荷車を弁護するならば、人は彼をきつと救い難い石頭と見なすであろう。小規模農業は近代的大規模農業にたいして、いと引き車や手織が機械紡績や織機にたいするのと同じような関係にある。昔は、千ヒロの糸を紡ぐためには千の糸車と数千の手足を必要としたが、その千の糸車が個人の所有であるかどうか、あるいは個々の糸車が特定の所有者を持っているかどうかは、どうでもよいことであった。まさしくそれと同様に、1万エーカーの土地をもつ一農場の耕作は各10エーカーの土地からなる千の小農業と同じ細部作業を必要とした。10エーカー農園の手労働の千倍が1万エーカーの農場の必要な手労働であった。小規模農業は過去の農業である。それは一つの社会構成に属し、また各地の、各村落の、ほとんどの各家族の人々の需要は自己の土地生産物によって充足されているような社会状態に属している。それは、住民の大多数がある程度土地に縛り付けられており、また農業が絶対的な生業であるような社会的状態に属している。小さな、自立した農民と大きな、資本家的な借地農の性格的な相違は、自己の必要のための生活手段の生産が前者の本業であり、他人の必要のための生産が後者の本業だということである。大規模な農業は鉱業人口のための生活手段と原材料を生産するが、小農業は農民自身のためである。

ミル氏は小規模農業を推奨し、そのために「将来は耕作されるすべての入会地は、小規模地主の一階級を生み出すために利用されるべきである」と、提案することで満足している。小農がいかに幸せな連中かを示すために、ミル氏は次のようなシモンディから文章を引用することで、読者に小農的幸福の大陸的な天国へ案内する。

「小農は、世襲の小さな地面のうえで自分の子供たちとともにあらゆる労働を行い、彼の上にたつ誰にも地代を支払うことなく、その支配下にある誰にも労賃を支払うこともなく、自ら生産したパンを食べ、自らつくったワインを飲み、自ら栽培した麻や羊毛を着て、ほとんど売ったり買ったりすることがないので市場価格に煩わされることもなく、商業の停滞によつた破滅させられることもない。不安をもつて将来を待ち受けることもなく、彼は将来に希望を膨らませるように見える。なぜなら、彼は彼の年々の労働に使わない時を、彼の子孫のために、彼の来るべき世紀

のために、利用するからである。少しの時間があれば、百年たてば大木になるであろう種を地に播き、彼の耕地を永久に灌漑するであろう溝を掘り、彼が囲まれているあらゆる種類の動物や植物を繰り返される周到さによって改良するために使う。彼の小さな相続地は、いつでも、彼の少しの儲けを受け取り、どんな寸暇をも有効にするための真の貯蓄銀行である。絶えず作用している自然の力がこの貯蓄銀行を実り豊かにし、それを100倍にして返してくれる。農民は所有者の身分に付随する栄誉という生気あふれる感情をもっている。彼はまた土地をある一定の価格で買うことをたえず切望している。彼はたびたびその価値以上に支払い、おそらくそれが彼にもたらすよりも多く支払うのである。」(ミル、同前訳、第2分冊、pp.118-119.)

われわれは一瞥して、この幸せな空想の産物はすべて蒸気機関の同時代人にはありえないことだということがわかる。なぜならば、紡績機、蒸気船、鉄道等々は、誰もが、彼が生産したものを売り、彼が消費するものは買わなければならないということによってのみ成り立ちうるのである。ある国が、ロンドン、リヴァプール、マンチェスターのようにこのような変わり者にとって居場所がないように見える都市をもっているのである。市場価格に煩わされる必要のない農民は、生活手段の供給が農民の気まぐれに依存しているロンドン、リヴァプール、マンチェスターの飢えた人間のことなど気に病む必要などほとんどない。ところでこのような人間が、シスモンディがこの賛美歌を書いた当時なお存在していてとしても、彼らはそれ以後死に絶えてしまっている。金儲けの必要性、そしてその結果としての市場価格に煩わされることの不可避性は、アルプス地方にまで迫っている。1866年にチューリッヒで、カール・ビュルクリ(ジュネーブの国際労働者会議代表の1人)のチューリッヒ州の国民銀行創設し、農民に利息を5から6パーセント以下でお金を借りることができるようにとの提案は、シスモンディの地上の楽園がチューリッヒの農民たちと何らのかかわりもないことの明白な証明である。ミル氏は自分の経験から、チューリッヒの農民がどのような状態にあるかを知っている。彼は彼らの勤勉さを驚嘆し、次のように付け加える。「私が朝の4時ないし5時のあいだに湖や遠くのアルプスを眺めるために開き窓を開けると、畑に出ている農民を見た。そして私が日没後しばらくして、8時半ごろ、夕方の散歩から帰って来る時、農民は畑で草を刈ったり、

ぶどうの樹を縛ったりしていた。」(ミル, 同前訳, p.120-121.)「この栄えているチューリッヒ州の地主たちの負債は信じられないほどで、絶えることのない勤勉さ、最大の儉約と節欲、そして完全な営業の自由だけが、やっと生計をたてることを可能にしている。」(同前, p.121.)

ホーヴィットはプファルツ地方のドイツの農民について次のように言っている。「彼らは朝早くから夜遅くまで勤勉に労働する。というのは、彼らは自分自身のために働いていることを意識しているからである。彼らは日々、年から年中、あくせく働き、彼らはあらゆる動物のなかでもっとも辛抱強く、もっとも倦むことを知らず、もっとも我慢強い。イングランドの普通の国民が、ドイツ人がいかに懸命な努力でもってその薪を手に入れているかを知れば、びっくりするであろう。初めてこれに接する読者は、スイスの文筆家が述べているように、小土地所有者の超人的な勤勉さが、私が引用したすべての目撃者に与えた強烈な印象に感動させられるに違いない。少なくともこの点では、すべての人が一致している。」(同前, pp.133-134.)

われわれはここでしばらく、このような勤勉な人々の生きる喜びがどこにあるかを聞くために、立ち止まろう。ミル氏は言う、「大陸の農民たちは、イギリスの耕作農民たちが小麦パンについてもっているような偏見に満たされてはいない。トスカナの農民たちは、シスモンディの言うところでは、不作の年には朝の10時と夕暮れ時の一日2回しか食事時間をもたない。朝は粥を食べ、夕方はいくらかのパンとスパイスのはいったスープをとる。夏には10時、1時、そして夕方の3度食事時間をもつ。一日のうち1回だけ昼食に料理するのに火をつけるが、それはスープとそれに塩漬け肉、あるいは燻製の魚、あるいは豆、あるいはその他の野菜からなる盛り合わせの一皿、それをパンと一緒に食べた。塩漬け肉は彼の日常生活費のわずかな部分でしかなく、週2回すこし鍋に入れられる。日曜日にはいつも新鮮な肉を食べるが、しかしどんなに家族が多くでも、せいぜい1ポンドか半ポンドにすぎない。」(同前, p.218.)

彼は言う、「フランダースの農民と日雇労働者は、イギリスの同じ階級よりもはるかにつつましく生活している。彼らは、日曜日と刈り入れ時を除いて、めったに肉を食べない。バターミルク、ジャガイモ、そして黒パンが彼らの日常の食べ物で

ある。その結果として、彼らは資本を手に入れ、彼らの大なる野心は土地を買うことにあり、土地価格は競争によって高く競り上げられるので、土地が購入価格にたいして2パーセント以上の利子をもたらしことはない。」(同前, p.147.)

「小土地所有者たちは放蕩が責められるよりもたびたび吝嗇が責められた。彼らはわすかの享樂も断り、節約するために浅ましく劣悪な生活をおくった。フランスでは、彼らが住んでいるあばら家と彼らの食料となる野草や根菜のために旅行者から一般的な貧窮の証拠と見本と見なされる者のなかには、革製の財布のなかに5フラン金貨からなる財宝をもっており、一筆の地面を買うという彼らの生涯のもっとも待ち望んでいる夢を実現するために使い果たしてしまうことが暴かれることがないなら、一生涯内証のままになっているかもしれない大勢の人間がいる。」(同前, pp.169-170.)

私は上述のことを再現するのは、ドイツの労働者に何か新しいことを言うためではなく、次のことを、つまりミル氏がいかに魅力ある光景によってイギリスの公衆の前に小農経営の推奨を正当化しようと試みているか、このことを示すためである。小農たちの節欲が資本家の節欲ほどには報いられていないことは、まさにミル氏がわれわれを信じさせようとしているような彼らをして生産手段を手に入れることへの性向からではなく、必然性から、小土地所有者たちがますます負債の深みにはまり、したがってますます貧しくなり、ひどい生活を送らざるをえないことから明らかであり、他方、資本階級はますます肥え太り、世代から世代へだけではなく年々豊かになり、自ら労働に携わることの不可避的な必然性なしに、である。まだ80年にならないが、フランスのそれまで農奴であった農民が土地の大部分を無償で手に入れ、残りも彼らが革命の間にばか安値で買った。1866年にデュ・ビュアンズ氏が下院(フランスの)で述べたことを聞こう、「1851年の国勢調査によれば、土地所有に付随した抵当付債務は100億フランに達していた。事態はそれ以降いちじるしく悪化したが、政府を動かして1861年の報告を公表させるためのあらゆる試みは、これまでのところ失敗している。その土地を売りたいがっている多くが買手を見出すことができない。それにたいして主として都市近郊にある比較的大きな土地は小さな区画に分けられ、いずれも高い価格で売られる。一帯の土地を買うために人々は、借金を少しずつ返済する見通しのもとで、しばしば自分で所有している二倍も多く

借り入れる。このような分割販売はただ新たな抵当権をもたらすだけである。フランスでは、784万6千人の地主のうち360万人より少なくない人々が対人税を支払うことのできない窮乏状態にあることが、地方自治体によって証明されている。」デュ・ビュアンス氏は、小農はその所得の29パーセントの税金を国家に納付しなければならないと計算している。1967年8月30日に、コート・ドールの参事会は知事に乞食抑圧のために1万2千フランを可決し、これによって知事はユラ地方の同僚と協議して乞食たちをブルグンドの乞食収容所に押し込めるべく処理されるはずであった。そのほかに4,500フランがなお乞食になっていない流浪の労働者救済のために可決された。

土地が借りた金で買われなくてはならないということのほかに、なお相続によっても借金を背負い込んだ。もし父親の死後子供の一人が父親の土地を受け取れば、その子供は他の子供たちの持分を現金で支払わなければならない、その現金は大抵の場合、借金される。お金を持ち、彼の分割耕地を有利に耕作するかわりに、この希望に満ちた若者は石臼が頸に掛かり、どうしようもなくなるような借金の重荷を負い始めるのである。抵当債務と税金が、小農を社会に結びつけ、彼を他の人間の運命に巻き込むところの桎梏となる。債務がなく、国家に対して増加する予算と赤字を補填するための義務がないならば、彼はシスモンディが描いたように、幸せな人間であったかもしれない。しかし、利息と税金が彼をして金儲けを強制し、彼は彼の土地収益の一部を売らなければならないし、そしてたびたび最良の部分売り、ただ彼自身の使用にとって最悪の部分だけを手許に残し、時としてその最悪の部分でさえ足りなくなるのである。このように小農は、自分と彼の地主としての名誉のために働いているのである！

さてわれわれは、長いあいだ猫の額ほどの土地を買うためにみすぼらしい生活をしてきた幸せな人間が何を達成するか、このことを問題にしてみよう。例えば、彼が幸せであって、そして千フランをかき集めたとしよう。彼がある地面を2千フランで買い、したがって千フランを借りる。この負債に対して彼は年々50フランの利子を支払わなければならない。しかしその土地は購入価格に対して2パーセント、つまり40フランの利子しかもたらさない。したがって、彼は彼が長年にわたって腹をすかせ、あくせく働いてきたことにたいして年々10フランの罰金を支払わなけれ

ばならない。彼自身の千フランは、資本家に年々50フランをその財布に詰めるための機会を与えるのに役立つだけである。その生産的価値はゼロである。小農が大農よりもよりすぐれていることを証明するために、ミル氏は、イングランドで1エーカー当り1ポンド10シリングしかもたらさない土地がジャージーでは4ポンドで賃貸されることを持ち出している。ジャージーでの小麦収穫高はエーカー当り36ブッシェルと見積もられており、借地農リグデンは32ブッシェルを獲得する。超過分の4ブッシェルの価格を控除すれば、ジャージーの小農はイギリスの借地農よりエーカー当り二倍の地代を支払っている。借地農リグデンのところでは各14エーカーの土地に1人の労働者が必要だが、ジャージーでは3人を要する。だから、小農が地主かあるいは借地農かということはどうでもよいことで、彼はその労働用具の値するよりもより多く支払わなくてはならず、勤勉と欠乏は彼らの存在の生存条件であり、同時に彼らの搾取の手段であることがわかる。ミル氏は主張する、小規模耕作は大規模耕作よりも生産的である、と。モロー・デュ・ジョンはこれに対して、フランスとイングランドを比較して別の結論に達している。彼の計算によれば、1850年の土地産出物の価値は次の通りである。

	フランス	イングランド
人口1人当り	133 Fr.	235 Fr.
農民1人当り	215 〃	715 〃
エーカー当り小麦（ブッシェル）	18 〃	30 〃
牡牛	2,365,864 〃	3,937,676 〃
羊	32,151,430 〃	57,200,000 〃
牡牛重量当り	3 〃	2 〃

フランスでは比較的小数の家畜が4,300万ヘクタールの土地に肥料を与えるが、イングランドでは比較的多数の家畜が2,300万ヘクタールの土地に肥料を与えた。

ミル氏は言う、「大規模な資本は最良の土地にのみ充用され、それを実り豊かにするために資本の急速な回転と結合できる以上により多くの時間と労働を必要とする小さな不毛な土地は放置されたままである。」

脱穀機、刈入機、そして蒸気鋤をもっている社会において、人々がせいぜい脱脂粉乳、馬鈴薯そして黒パンといった人間以下の仕方生きるために、超人的な勤勉

によって不毛の土地を耕すことを運命付けられているということを正当化することができるであろうか。しかもミル氏は、農業労働者の状態を改善するためにこのことを提案するのである。もし大規模農業において100人の労働者が蒸気と機械の助けをかりて300人の小農の超人的な、分散した努力による以上の生産をすることができれば、経済学は存在している小農経営を抑圧することを命じているのである。与えられた諸条件のもとでの手労働の減少が手工労働者に有害であれば、この状態を変えるか、あるいはそれかわらないのであれば引っくり返し、より良くすることは彼らの問題である。小農経営は政治的に、社会的に、かつ経済的に方向づけられている。それは近代的産業と社会的進歩の信頼できる、歩調を合わせて進む同志ではどこでもなかったし、またありえない。それは政治的・社会的進歩にとって無用の長物であり、大陸での他のどことも同じようにフランスでも労働者運動を麻痺させる錘である。土地熱狂の時代は過ぎ去った。今日の労働者は自分の鋤を持って不毛の荒地で自らを解放しようと夢見たりはしない。頭のおかしくない労働者は誰一人として、ミル氏が紹介したような小農の状態、生活様式と労苦がイギリスの日雇労働者の運命を改善すると見なしたりしないであろう。イエズス会の厳しいしつけのもとにあるフランスの農民にくらべてはるかに国民的誇りをもたず、よりいっそう人間悟性を持っているように思われるドイツの農民は、彼らの家財道具を荷造りし、群れをなしてアメリカへ移住する。

集積された資本と結合された労働が手工業的経営の分散的労働をしのぎ、また取り除いたように、遅かれ早かれ協同的・組合的な生産が資本主義的生産をしのぎ、また廃棄するであろう。協同的運動こそが生来の子供であり、大工業と農業の自然生的な胎児である。組合的な生産はとりわけ先行する工業的な訓練を必要とし、それなしには個々の成員は調和的に協働することができない。いかなる個々人も多くの他の人々と協働することなしには消費のためのなんらの完成品も生産することのできない工場制度は、協同組合的な生産の工業的な訓練学校である。だからイングランドの北部の5都市が連合王国の協同的経営の3分の1をしめているのである。今日の工場労働者が習慣上行っていることは、ロンドンの手工業者がいつか道徳的確信から見習うかもしれない。それでも小規模で経営されうる、例えば製靴業、仕立業等々のような事業における協働は、善意に委ねられたままである。多くの人間と

機械とが同時に運転されるのでなければ、1ペニツヒの価値も製造することができないところでは、協同は美德であることを止め、軍隊の協働のように、自明のことになるのである。

大規模農業の賃労働者は彼の所有者的仲間より非常に多くの長所をもっている。彼は1人の上役の命令に服しており、結合された労働に従わなければならない。彼は、彼が小規模農業で用いられることのできない道具を持って労働することを常にしているので、すでに協同に参加しているのである。彼のわがままと気分だけが規準として役立っている小地主は、それには向いていない。労働者たちは小農経営を導入しようとする試みを大事にいたるまえに防ぐことに直接的な関心をもっている。未墾の、そして共同体の山林を小さな農場に転化するかわりに、彼らは全力をあげて、その山林だけでなく王室領や教会領も国家の命によって農耕共同体へ、つまり永久的所有としてではなく、社会があらゆる生活資料の源泉である土地にたいする管理を保障するような借地契約者のもとに、委ねられるように努力すべきである。

XII. 労賃と人口

1. 人口制限のための法的制限

もし強制的に課せられた禁止と制限が人間社会を、賢明に、道徳的に、そして幸福にすることができるとすれば、世界はとうの昔に樂園になっていたであろう。さまざまな時代に流行によって人為的に導入され、また他の時代には故意に課せられた強制的な禁止と制限を考慮すると、人類の一大部分は決して束縛を免れてこなかった。それにもかかわらず、経験は次のことを、つまりいつでも人民を束縛してきた政治的・社会的拘束衣が拡大すればするほど、全体にとっての諸条件はますます好転するということを、十分に証明している。いろいろな時代にわたって貫かれてきた人口増加にたいする妨害と制限は、例外をなすものではない。過剰人口への恐怖は人類史それ自体と同じように古い。アリストテレスやプラトンは、人口の制限によって奴隸制にもとづくギリシア文明を永久化するために努めたし、中世の苦行僧たちは独身を説き、都市の諸組合は「風が吹き、雄鶏が鳴くかぎり」効力をもつべき人口増加に反対する法律を作った。すべて人類が永久に幸せになるために。19世

紀のマルサス主義者たちをアリストテレスやプラトンから区別しているものは、前者が富裕な貴族の増加を制限しようとしたのにたいして、後者がその犠牲論を被抑圧階級にのみ適用していることである。自然学者は、有機体の固有の傾向は植物にしろ動物にしろどんな種類でもそれが無制限に増えることができるならば、たちまち地球を覆いつくしてしまうほど大きいということを、証明している。

この科学的な原理の抽象的正しさを否定することなしに、私は、ただこの傾向はすべてのものに共通であり、また地球それ自体の表面は変種を前提としており、いかなる有機体もかなりの地面だけでもすべて他のものを排除して覆ってしまうことはできない、ということ述べておきたい。自然は万物の母であり、またその存続を配慮している。

賃労働者を含むあらゆる有機的生物の存在は既存の生活資料に依存していることを、労働者たちは悲惨な経験から知っている。しかしマルサス、ミル、そして『国民的改革者』の編集者であるブラッドラーフのような人々がこれらの原則を人類にも適用するとき、彼らはまずもって、一般的原則として、より下位の有機体はより上位の有機体に食料を提供していること、増殖能力が増加しつづける量と完全性とともにより上昇すること、そして人間は彼らの欲望にしたがって増えるところの手段を調達すること、これらのことを忘れている。第二に、彼らは理性の道を離れて、自然法則に基づいた科学的な原理を擁護するという口実でもって、彼らはそれを、何が既存の生存手段であるとしても大部分が欠乏し、個々人がしばしば餓死することを運命づけられており、また生産者の困窮が彼らの労働の生産性増大と同じ割合で上昇する、そのような社会的状態に適用するのである。マルサスとミルにあっては、このような乱用は許されるべきである。アリストテレスやプラントンのように、彼らは人口のさらなる増加が不可避免的に伴うにちがいない時代の社会的状態を堕落——社会的変革——から救い出そうと望んでいるのである。全体として、彼らは現存する社会を永久に維持されうる、そして人間の幸せと一致するものと見なしている。彼らは現存する貧困を過剰人口から引き出し、そしてそこにある弊害にたいしては、労働人口をあらゆる財貨の所有者が将来の富の獲得に必要であるような比較的少ない数に引き下げること以外には何らの処方箋も知らないのである。これにたいして『国民的改革者』の執筆者のような人々にあっては、このような教義の弁護は許し

がたいことである。彼らはあらゆる信仰心のあつい宗教の超自然的なものを否認し、そして敬虔な異教徒と中世の修道僧の犠牲論を説くのである。信心に反対する彼らの教説は、精神的で、道徳的で、また政治的・社会的な革命を含意している。それらは、生きることの労働者の権利が、何らの分け前にあずからない富の生産に労働者を充用しようとする資本家の見込みによって条件付けられているような社会の解消と、すべての働く人間が生存の喜びを自然的権利としてもっているような社会の出現を、含意している。

歴史のあらゆる時代において現存する状態が不安定になったとき、現存する状態を神聖なものと唱えた宗教への疑惑が、つねに政治的・社会的変革の前触れであった。「一羽の燕が決して夏を招来するのではない」とイギリスの諺にあるが、一夜にして凍死する最初の燕は、冬の日がその終わりに近づいたことを告知している。ソクラテスはキリスト教的春の最初の燕であり、彼は毒杯を飲み干さなければならなかったが、キリスト教的革命が続いた。十字架に架けられたキリストの旗のもとで、古代国家は破壊され、封建国家が建設された。アーノルド・フォン・ブレスチアは最初のプロテスタント的燕であった。彼は死刑にされたが、改革が続き、そして良心の自由の旗の下で中世的な教皇政治権力は滅ぼされ、近代ブルジョア社会の基礎が築かれた。今日の自由思想は労働者問題の解決と分ちがたく結びついている。それはあらゆる啓示信仰を破棄しているので、現存する状態の正当化を否認し、またその不合理を確認する。地球は人間が永久的な幸せを準備すべき娑婆であるとの信仰とともに、ブルジョア的社会の道徳的基礎、つまり労働手段の私的所有の承認は消えうせる。働く人々はここでは、天国に慰安を求める代わりに、彼らの報酬を要求する。自由思想家たちは彼らの歴史的使命を達成するために、労働運動の味方とならざるをえず、これは過去のキリスト教的殉教者たちが彼らのそれぞれの時代に向き合ったことでもあった。『国民的改革者』の人々は、彼らが一つの教義を弁護し、その可能な実現が資本の支配の存続を保障するためのマルサスやミルの最後の避難所である限り、この使命を決して果たすことはできない。

さてわれわれはミル氏が言うことに目を転じよう。彼は次のように始めている、「ヨーロッパのいかに多くの国々で、軽率な結婚が直接の、法的な妨害によって邪魔されているかということは、広く知られてはいない。」（同前訳、第2分冊、p.

294.) 彼は、ノルウェー、メクレンブルクの同業組合法、メクレンブルクの農奴に属する諸関係、ザクセン、ヴェルテンベルク、バイエルン、リューベックの同業組合法、プロイセンの軍法、スイスのルツェルン、ナーガウ、ウンターヴァルデン、セント・ガレン、シュヴィーツ、そしてウリといった各州の妨害を引用している。彼はもちろん、これらの法的妨害が進歩した国々では資本家階級それ自身によって撤廃されてしまった中世のツンフト制度の残存物であること、これらの同業組合法が小さな手工業者に大資本家たちの日々の侵害にたいして何らの保護も与えないこと、多くの場合、同業組合と政府は彼らを市民と親方にならせるために憐れな奴から彼らがあくせく働いて貯めたお金を奪っていること、そしてその後で彼は、イギリスの労働者（彼は同業組合や国家がなくても結婚できるし、彼の貯蓄で動産を買うこともできる）が賃労働者として大資本家のために働かなくてはならないこと、これらのことについては一言も語らない。私は、ドイツの労働者にここで再度私がかつてこのテーマについて『デモクラティシエス・ヴォヘンブラット』の私の論文で述べてことを繰り返すことは余計なことだと思う。というのは、彼らは、このまったくくだらないことが労働者の福祉にどんなに慈しみ深い影響を及ぼすかを、私と同様によく知っており、そして多分よりいっそうよく知っているからである。とくに近代的大工業についてほんのわずかでも思い描くことのできる者なら、リューベックやメクレンブルクの同業組合法やそれに付随した婚姻法が、3千から4千人のさまざまな作業部門に属している労働者がほんの1人の親方——造船業者——のために働いており、一方に荒削りの丸太や粗鉄塊を建設現場に運び込み、他方にはすっかりできあがっている、着色され、ニスを塗られた船を進水させるロンドンの造船所のような経営といかに調和しているかを、想像することができるだろう。そこでは、働いている手工業者の市民化や親方化などとてもない。3年ほど前にロンドン東部の造船所で雇われていた数千人の労働者は、今日では世界の各地に分散している。ある教区では700軒の家が空き家になっており、相当の都市を満たすであろう住民が、しばらく前までは何も心配ないように思われた彼らの生活資料を他のどこかに求めてそこから逃げ出さなければならなかった。しばらく前までは上機嫌で、貯蓄銀行にお金を預けていた他の連中も、今ではもっともみすぼらしい欠乏にあり、さらに他の連中は窮乏の犠牲となってすでに斃れてしまった。いかなる婚姻法が家

族の生存手段を保証しうるのであろうか。

ミル氏の立派な理想はイタリアの農民である。彼は、彼の言うところによると、身分の高低に関係なく一家族の息子すべてが1人を除いて結婚しないでいるイタリア人のようにイングランド人が行動しないことを残念に思っている。彼はそのほかげた盲目ぶりに皮肉にも次の言葉を付け加える。「このような家族制度は日雇労働者のもとでは期待する余地はない」(同前, p.299.)と。われわれにこの世の幸福への道を示すために、またしてもシスモンディが呼び出される。その引用文は次の通りである。「賢明な人間はだれでも来るべき時代がその過ぎ去った時代にとって代わるという希望をだいにしなければならぬ。息子と娘は成人すればその父や母にとって代わり、彼らが亡くなるべき順番が来れば、その孫や孫娘は息子やその嫁にとって代わる。彼の娘は他人の家で、あたかも他人の娘が彼の家であるのと同じように宿を見つけ、父親たちを満足させた収入が子供たちにも十分であること。このような家族がひとたび形成されると、正義と人道の要求は、彼が独身生活を送る者たちが置かれるのと同じ欠乏を背負われされることを条件とするのである。8人の子供をもつ父親は、そのうち6人が子供のときに亡くなるか、あるいは彼の世代の6人が亡くなり、そしてそれに続く世代においては彼の息子の3人と彼の娘の3人は結婚しないことを覚悟すべきであった。」(同前, p.355.)

このようにチューリングの農民は彼らの牛を処分する。彼は、彼が雄牛や牝牛を食肉業者に売るだけの子牛を飼育する。牛の一族の成長した一頭が太らされるたびに、牛の子供一頭が飼われる。数頭のとくに優良な乳牛が村にいれば、農民たちは彼の子牛を飼育のために購入し彼の所有している牝牛を屠殺する。人間の社会にとってなんとすばらしい理想であろうか。19世紀後半のイギリスの公衆にこのほかげた話を聞かせ、かつ推奨するその人が進歩的人士と見なされているのである。シスモンディの道德律は、「風が吹き、雄鶏が鳴く限り」変わることなく継続すべきある状態に関係している。同数の人間を住まわせるための同数の家屋、同数の雄牛と牝牛、同数の物知りと文盲のロバ。すべての耕作可能な土地が所有されるようになった瞬間から、人間の諸制度は化石化する。すべてが数学的精密さでもってあらかじめ決められているのである。しかしながら、あらゆる政治的・社会的化石化を流動的にし、また絶え間ない動揺によって不断の流動状態に保たれている近代的生

産方法は、この精密哲学をすっかり台無しにする。いかにしてシスモンディ流の知恵は最近50年間の経済的進化と調和させられうるのであろうか。誰に子供を産むことを許し、また誰にそれが許されるべきではないのか、それを誰が決めるべきであるのか。わがアングロサクソンの祖先のように、われわれは過剰な子供たちを子猫のように溺れさせるべきなのか。その労働が機械によって置換えられる何千人、何万人をどうするのか。20年後にどれだけの仕立人、靴職人等々が必要とされるのか、誰が決定すべきなのか。男と女が彼らの後継人を供給した後には、われわれは彼らを互いに引き離すべきなのか、あるいは彼らが多くの子供を生んだ時には、若者や娘たちに互いに愛し合うことを妨げるべきなのか。あるいはわれわれは人間を、最早あるいはまったく増殖に必要とされなくなった家畜のように扱うべきなのか。そして、すべてこのことは人口のこれ以上の増加は現存する所有諸関係を脅かすためという単純な理由からなのか。このようなごまかしは投げ捨てしまえ。近代社会は、その権利を見いだすために、モロク神（セム族の神。子供をいけにえにして祭ったといわれる。——訳者）の祭壇に捧げられた労働者の残酷な犠牲とは別の、そしてより崇高な手段を持っているのである。

ミル氏は言う、「農業労働者にかんして、人口はなにによってもほとんど制限されていないと主張しうるかもしれない。ヴィルトシャー、サマーセットシャー、ベッドフォードシャー、ブッキングシャムシャーといったいくつかのもっとも専制的な農耕伯爵領における労働者の状態は、悲惨なように見える。多くの家族をもち、また彼らがたっぷり働いても週7シリングかせいぜい8シリングの週労賃しかもらえないこれらの伯爵領の労働者たちは、最近では国民的な哀れみの主要な対象になってしまった。今こそ、彼らに見出された人知の適用という善行が分け与えられるべきである。」（同前，p.302.）

「労働者の悲惨さにかんする討論や嘆き、それにたいして冷淡だと思われるすべての人々への中傷、それを改善すべきだとのいろいろの企画、これらは今日のイングランドにおけるように騒ぎ立てられている国はないし、また時代もなかった。しかし、「冷酷なるマルサス主義」——必ず貧窮になり、また多分墮落するにきまっている娘っ子の群れを生ませてもらえないというかわりに、よろしいということが

千倍も冷酷ではないかと、人に言わせる——といった表現でもって、労賃法則をまったく無視するか、あるいは括弧に入れて脇に押しやるといった暗黙の一致が支配している。もし彼らの数が少なければ、彼らはより高い労賃を獲得できるようになるというのは、正しいのかどうか。これが問題であり、それ以外は問題ではない。マルサスあるいはその他の論者のなにか取るに足りない点を攻撃してこの点から注意をそらして、そしてこれに対する論駁が人口の原理を覆すと言ひわけにすることはくだらないことである。」(同前, p.303.)

マルサスとその弟子たちはこのこと自体に感謝すべきである。このことだけが彼らの大切な理論を混乱させる混同と錯雑に責任を負うべきである。機械と同じように景気の変動によって絶えず過剰になる労働者に関連して彼らの出現を正当化するために、彼らは学問に逃避し、またこのことを押さえ込んでしまった。彼らは、「あらゆる有機的生命は現存する生活資料によって制限されている」という科学的原理を社会的発展のある特殊な局面に適用し、彼らは人間がある程度までその生活資料の創造者であるという事実を無視し、人口がその生活資料を凌駕し、人の手に負えなくなったかのような外観のもとで、彼らは労働人口を駄馬の必要数が決められるところの基準で処置することを企てるのである。ミル氏の疑問に明確に答えるために、私は次のことを明らかにする。つまり、もしなんらかの経営でそこに1千人分の労働があり、またただ900人の労働者しか得られないならば、そのとき900人の労働者は1,200人の労働者がすべての仕事に対してよりも100分の95に対するよりも多くを受け取るであろうことに何の疑問もない、と。しかし、われわれが一致するのはここまでである。それでもってわれわれの一致は終わりである。

2. 生活資料の人口一般に対する関係と特殊賃労働人口に対する関係

70年前、田舎司祭マルサスは、人口は幾何級数的に(1, 2, 4, 8, 16, 32, 64, 128のように)増加する傾向をもち、これに反して生活資料はただ算術級数的に1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8というようにしか増えないと宣言した。だから無制限に増殖するさいには、8代目には人口はその生活資料にたいして16対1になるであろう。1803年にでた彼の著書の第2版で、彼は、5年前には新しい発見をしたと信じた、まったく率直に告白している。その後の研究を通して彼は、数千年

前には過剰人口の危険を避けようと努力した人間がいたことを発見した。彼の忠実な弟子であるミル氏は、60年後に師匠の教えに全身全霊をもって追随しているが、それにもかかわらず次のように述べることでむく犬の正体を暴露している。「最近の30年ないし40年のあいだに、農業における改良された工程は急速に普及したので、土地は投下された労働にたいしてより生産的である。」

そして、人間社会のあらゆる発展段階においても同じようなことが起こらなかったのであろうか。

だから疑問が生じるのである。労働が生産的になればなるほど、労働者はますます少なく雇用され、彼らの惨めさはおおきくなるというのは、真実か否か。これが疑問である。それ以外のなにものでもない。需要と供給の背後に隠れており、自然法則を証明として持ち出すのは、無意味な誇大広告である。自然法則、つまり増殖の内在的傾向がイギリスの農業労働者の窮乏とどんな関係があるのか。地代や土地産出物が増加する以上に、労働者は減少し続けないのか。労働者の状態は一般的な生活手段が増加するのに比例して悪化しないのであろうか。労働者の状態を惨めに行っているのは、地球が与える生存手段にたいする労働者の自然的増殖傾向でもなく、彼らの労働生産性の不十分さでもなく、現存する生活手段の不足でもなく、彼が少ない労働で多くを生産させられ、労働者が労働の成果の直接的な所有者ではなく、また労働の価格がその生産物の増加に比例して低下する、そうした社会状態に生きているという事実がそうするのである。

すでに見てきたように、もしある機械装置が採用され、その仲介によって昨日まで100人で生産されたもの以上を10人の労働者で生産することができるようになったとすれば、労働し続けている10人は飢餓賃銀で働かなければならないであろう。もし彼らが生産した特別な商品にたいする需要が倍加すれば、20人の労働者が雇われるであろう。この場合には、自然法則的な生活資料は倍加したとしても、賃労働者のそれは10分の8に減少したであろう。自然法則的な生活資料は労働者にたいして200対100の関係になり、資本主義的取得法則によれば、20対100になったであろう。労働人口は資本主義的生産様式が認める生活手段にたいして100対20の関係になるであろう。それは競争している労働者が突然5倍になったのと同じ作用をもつであろう。これが今日の社会の過剰人口であり、それが貧困を生み出すのであり、

そこからマルサス主義者は産児制限によって労働者階級を救済しようとする。これは同時に、マルサス主義者たちが無意識的にかまたは故意にか信用を失わせることを告知するところの特別な場合である。彼らは雇用されうる労働者の数は恒常的であり、またただ増殖だけが制限されるべきものであると仮定している。首尾一貫するためには、彼らはどうにかして人口が突然ある瞬間に減少するという手段を持ち出さなければならない。その労働が今日絶対に必要だと見なされている10人から9人を、彼らが景気の停滞によってか、流行の変化によってか、あるいは機械によってか、一夜にして不要になったという理由で、明日取り除くことよりは、子供をつくったことを罵ること、両親を中傷すること、そして彼らを非難することのほうがはるかに容易である。彼らは、取引所の景況風見鶏が嵐を予告し、より恵まれた世界各地で無料で露命をつなぐとき、労働者が渡り鳥同様に姿を消すように、あるいは産業的溫度計が氷点に下がり、また生産が停止されなくてはならないとき、冬の接近にさいして蠅が凍死するように、労働者をいかに処置するかという手段を申し述べなければならない。(したがって、例えば、1866年春まではイングランドの誇りであり、またその制海権の欠くことのできない支柱をなしていたロンドン東部の8千から1万人の造船工たち——世界に匹敵するもののなかった生産力——は、1866年秋のある美しい朝にその家族もろとも地上から姿を消すべきであったろうに。)しかし、最初の繁栄の兆候が景気の回復を告知するやいなや、彼らはまた帰ってこなければならなかった。木綿工場、羊毛工場、そして生糸工場にとって、大人の男女になることのないような少年や少女が調達されるべきであった。今日なお手労働によってなされている経営のために、マルサス主義者は労働者がその肉体的生活能力をあるなんらかの自動機構によって置き換える可能性によって制限されているところの労働者をどのように生み出すかを申し立てるべきであった。彼らはわれわれに最低限つぎのことを示すべきであろう。つまり、若者たちが最初の10年間営業に従事し、次の10年間は用いられないといったことを、いかにして防ぐべきであるか。彼らがこうしたことを実行に移すことができないのであれば、労働者人口の減少そのものは、機械の進歩が実際の労働者不足の起こらないように配慮するであろうから、決して賃銀上昇を伴わないであろう。労働人口は、資本によって生産費として与えられた生活資料を凌駕するであろう。上昇する労賃と周期的な労働者不足は機

械の発明とその実践的な応用への主要な刺激を与える。

ミル氏はさらに言う、「旧い国々では人口は生活資料の不足によっておおいに制限されているということは両方において認められないか」（同前，p.291.）と。私はそうは思わない。イングランドあるいは西ヨーロッパのどこかある他の国と今日のアメリカあるいはオーストラリアを比較することは、言ってみれば、問題を回避することであり、無意味である。ヨーロッパ人はそれぞれの国々で、世界史の偉業ともっとも進歩した、また人口のもっとも稠密なヨーロッパの国々の経済的発展の結果である手段や道具をもって耕作を始めたのである。そのさい彼らは、ヨーロッパにけるように伝統的な障害によって妨害されることはないという利点をもっていた。彼らの理論を科学的に証明するために、マルサス主義者たちは、古代ブリトン人、アングロサクソン人、アメリカの赤毛のインディアン、そしてオーストラリアの原住民が今日の人口よりもはるかに生活資料に恵まれていたことの証拠を挙げなくてはならない。彼らの親分であるマルサスは、彼が持ち出しているいかに食料の不足や疫病によって人口が抑制されているかの証拠のなかに、彼の理論の科学的な部分——科学の手込めにされた部分——にたいして過剰に証明している。彼は地上のあらゆる居住者のなかのもっとも貧しい住民を、ティエラ・デル・フエゴ（南米南端の群島）の住民から始め、そして組織的に不具にされ、死ぬまで酷使されるイングランドの工場労働者をもって終わり、気付かないままに、ある民族の文化段階が低ければ低いほど、人口は希薄で、したがって飢餓によって根絶させられる危険は大きいといったきわめてセンセーショナルな証明をしている。そこで彼は例えば、豊饒な土地、オーストラリアにおいては土着の多くの種族が飢餓病によって短期間のうちにわずか数人にまでなってしまったとことを証明する。彼は彼の理論に反対して、進んだ文化と増大する人口の集中化にともなって飢饉は少なくなり、疫病は沈静化され、また減少させられたことを証明する。

ジュースミルヒによれば、プロイセンとリトアニアの死亡件数は1702年から1708年の間では平均1万6,430人であった。1709年と1710年の2年間に57万人の人口のうち約23万人がペストで死亡した。ロンドンでは17世紀の間に3度ペストに襲われた。1603年には5万6,000人が死に、1625年には3万4,517人が、1665年には6万8,596人が死んだ。全体ではロンドンでは1665年に9万7,306人が、1664年にはたったの1

万8,297人であり、したがって1万人以上が間接的な犠牲者として斃れた。19世紀はペストをコレラによって追い払った。ジュースミルヒは『神の秩序』という表題のもとで死亡表を公刊した。ロンドンでは1665年に、人々はこの忌まわしい神の訪れを避けるために一般的な懺悔日と祈祷日でペストに対処した。今日では、こうした病気が突発する家屋や通りは衛生警察によって襲われる。以前には人間たちを殺した『神の秩序』（無秩序）は、彼らを生かしておくための警察条例に転化している。1849年ロンドンでは228万人以上の人口のなかから1万3,098人がコレラで死んだが、1854年にはもっと増加した人口のうちたったの9,707人だけであった。ホーウェ博士は彼の著作（1855年）のなかで、疫病の原因を月に求め、戸籍長官はその報告の中で次のように述べている。「コレラは雷のような声でもって、人の健康と生命に責任をもつ官吏として心配すべき人々の犯罪を告知する」と。時とともに、衛生警察は赤貧や餓死を除去するようになるであろう。

17世紀には33回の物価騰貴、11回の飢饉があり、合計すると44回であった。18世紀には28回の物価騰貴、9回の飢饉、合計で37回。19世紀になって、この65年間に、14回の物価騰貴、1回の飢饉、合計で15回。とりわけ19世紀の物価騰貴と飢饉はそれ以前の世紀の物価騰貴と飢饉とは同じ意味のものではなかった。マルサスは、1680年の大飢饉の間に、ある農場では16家族のうち3家族だけが、他の農場では169人中からろうじて12人が生き残ったというスコットランドの二つの事例を引用している。

アイルランドでは20年前に人口の8分の1が飢餓で死んだ。飢餓の年に、アイルランドは地代を支払うために、182万7,132クォーター穀物と豆類を、93万2,930頭の家畜、その他ベーコン、ハム、バター等をイングランドに送った。イギリスのアイルランドの土地所有者は飢饉に瀕している民衆の運命に同情したが、彼らの生活資料を合法的なやり方で奪ったのであった。誰が100万人のアイルランド人に餓死の宣告をしたのか、自然法か土地法か。アイルランドからイングランドへの家畜輸出（単位は頭数——訳者）は次の通りである。

	1846年	1847年	1848年	1849年
牡牛と牝牛	186,483	189,960	196,960	201,811
子牛	6,363	9,992	7,086	9,831

羊と子羊	259,257	324,179	255,682	241,061
豚	480,827	106,407	110,787	68,053

人口の減少にともなって土地の生産力も減退した。伯爵領ライメリックの公式の農業統計はつぎのような結果を提供している。

	1848年	1852年	1857年	1862年
小麦（エーカー当り20スタインの樽）	7.1	5.7	5.6	3.2
燕麦（　　〃　　14　　〃　　）	9.5	10	8.5	5.9
大麦（　　〃　　16　　〃　　）	9.1	9.6	7.8	5.7
馬鈴薯（　　〃　　20　　〃　　）	66.7	41.7	24.7	16.5
カブラ（エーカー当りトン）	18.1	18.5	12.7	7.1
亜麻（エーカー当り14ポンドのスタイン）	48	43.6	32.1	34.2

数年前に、支配階級は彼らの新聞記者からアイルランド人の状態の改善にかんして祝辞を受けた。植民地の諸商品の消費増加が証拠として引用されていた。1865年の政府報告書は次のように示している。

人口1人当りの消費

	イギリス		アイルランド	
	1841年	1863年	1841年	1863年
茶	1.71 Pfd.	3.12 Pfd.	0.60 Pfd.	1.97 Pfd.
砂糖	22.45 〃	44.00 〃	4.64 〃	3.16 〃
コーヒー	1.47 〃	1.36 〃	0.13 〃	0.12 〃
タバコ	0.97 〃	1.30 〃	0.67 〃	1.13 〃

イギリスの人口は増えたが、アイルランドの人口は減少しており、注釈は無用である。

ナッソウ・シーニア教授はオクフォード大学の講義の一つで次のように言っている。「未開民族の状態は不断の欠乏と時折の飢饉の状態である。わずかな人口と乏しい生活手段。野蛮状態にあっては一般的であるほどに今日欠乏が支配していない国が一つでも発見されうるならば、生活資料は人口にくらべてよりいっそう増える傾向をもっているということは真実であるにちがいない。

もし人類に野蛮から文明に舞い上がる傾向があり、生活資料がある文明化された

状態で野蛮状態におけるよりも豊かに存在するということが承認されれば——そして二つのいずれも否定されえないとすれば——，必然的に，生活資料は人口よりも相対的に急速に増加する傾向をもっていると結論しなければならない。

ある民族の性格を卑屈にし，あるいは生産力を減少させるものはすべて，人口に比例して生活資料の減少をもたらす，反対の場合には反対である。このことから，生活資料以上に急速に増加する人口は，一般に悪政の徴候であり，それはより深く潜んでいる弊害をその結果示す，ということが結論付けられる。」

このような主張によれば，現存する生活資料を超える過剰人口は自然的な傾向の結果ではなく，不良な状態と悪い行政の結果だということになる。

中国の人口の稠密さは多くの有能なヨーロッパの著述家たちにくだらない話を書く材料を提供してきた。例えばモンテスキューは気候が育児にとくに好都合であるに違いないと想像している。マルサスは自然的土地の優越性とその有利な状態の原因が温帯地方の最も温暖な地帯と紀元前179年に文帝がその臣下に農耕を奨励するために示したよい模範にあると言明している。彼は言う，「この国の全地表は，少数の例外があるが，人間の食料の生産に当てられており，多くの場所で年2回収穫され，兵士でさえ農耕を行わなければならない。」イエズス会のプレマルンは広東について書いている，「土地がどんなに広く，肥沃であっても，その住民を養うには十分ではない。彼らすべてを幸せに養っていくには，4倍も地面を必要とするであろう。人は貧しい中国人を，彼らがヨーロッパの貧民と同じように怠けていて，彼らが働く気があれば，彼らの生計をまかなうことができるなどと，陰口をたたいたりすることはできない。中国人は度々水路作りで終日を過ごし，夕方一杯の米を食べ，米を入れて煮た水を飲むことで幸せだと思うのである。これが彼らの通常の食事である。」

中国の面積についても人口についても大いなる曖昧さが支配しているように思われる。アルブレヒト・フォン・ローンによれば，本来の中国の面積は7万3千平方マイル，ギュツラフによれば，6万1,054平方マイル，『クォーターリー・レビュー』によれば，5万800平方マイルになる。人口にかんする報告は2億2千万人と5億人の間を動揺している。マルサスによって提供されている最小の面積での人口に割り振れば，1平方マイル当り6,500人になる。ザクセン王国では，1平方マイルに

7,000人が生活しており、デュッセルドルフの行政区では9,000人、ジュネーブ州では1万人を超えており、イングランドとベルギーでは約千人である。マルサスはフランスのイエズス会士を反復して、中国の人口は貧民たちが彼らの新生児を溺死させ、不作の年には父親がその息子や娘を、彼自身の妻そして時として自分自身をも奴隷として売って、生きながらえようとするくらい高い水準に達している、という。彼はその読者に過剰人口の観念を与えるために、中国をその人口が2,600万と見積り、面積では中国に対して3対2のフランスを比較する。したがってフランスの宿命的な数字は3,900万人である。五感をもっている人で、中国のような気候とその肥沃さなしに、そして穀物畑を拡大するために街道を狭くすることなしに、今日フランスの土地が3,900万人の住民を養うことができることを疑う人がいるであろうか。フランス人はマルサス主義者をして、イングランド人よりもより緩慢に増えることで喜ぶが、しかしマルサスによって想定された中国の人口の似かよった稠密さを街道に横になり、飢えさせることは彼らを満足させない。財政的困難と農業にとっての比較的不利な状態のもとで、フランス人は彼らが必要とするよりもより多く生活手段を生産し、イングランド人に年々著しい量を売るのである。

フランスの対イングランドへの小麦と卵の輸出

年	小麦 (トン)	卵 (個)	年	小麦 (トン)	卵 (個)
1850	4,986,345	105,689,060	1859	8,124,978	148,631,000
1851	5,200,016	115,526,245	1860	4,583,412	167,695,400
1852	2,001,295	108,281,233	1861	1,359,882	203,313,360
1853	1,489,764	123,450,678	1862	1,961,835	232,321,200
1854	894,734	121,946,801	1863	1,857,403	266,929,680
1855	223,601	99,732,800	1864	2,854,424	335,298,240
1856	130,665	117,230,600	1865	6,058,902	364,013,040
1857	569,998	126,818,600	1866	8,023,530	438,878,880
1858	5,581,064	134,685,000	1867	2,140,832	397,934,520

その他、フランス人は年々家禽、果物、馬鈴薯、ブドウ酒、そして約2,000万クオートのコニャックをわれわれに送っている。フランスの統計はさらに、フランスにおける1人当りの小麦消費量が次のように増えたことを示している。

	1760年	1784年	1800-15年	1840-50年
小麦（1人当りリットル）	108	125	133	175

だから生活資料は人口よりも急速に増加したばかりでなく、その増え方は通増的に上昇したのである。過剰な人口のために必要不可欠な生活資料を土地から苦勞して取り出すための中国人の驚くべき努力と、その文化の優越性はわれわれには必要な諸条件をつくることなく、勇氣と力をもつことなく、彼らの生存を確保するためにある衰弱した民族の死に物狂いの努力以外のなものにも思われない。というのは、数世紀にわたって無為に生きてきた化石のような状態と、そして数十万人が餓死し、絶滅すべき運命にあるからである。

つい最近イギリスの商務局によって公表された諸国における人口の相対的な稠密度の集計の一つによれば、イギリス的な1平方マイルにイギリスとアイルランドでは258人、イタリアでは225人、フランスでは180人、プロイセンでは179人、オーストリアでは155人、スペインでは84人、ロシアでは31人、トルコでは19人になっている。マルサス流の理論によれば、トルコ人はヨーロッパで最良の食糧供給国ということになるが、われわれは事実は正反対であることを知っている。

アメリカの原住民はその生活資料を超えて増加したので、ヨーロッパ人がこの新世界に最初に足を踏み入れた当時であつては、飢饉と飢餓によって絶滅させられる最大の危機に瀕していた。4世紀にわたって、新世界へのヨーロッパの移民の流れはやってきたが、幾何級数的に増加する若々しい人口は25年間で倍增したが、今日でも北アメリカの合衆国において1平方イギリスマイルに11人しか棲んでいない。

あらゆる明確な反証にもかかわらず、ミル氏は1865年に、1798年のマルサスと同じように、人口はその生活資料よりも急速に増加すると主張している。そして、この大思想家は窮乏に苦しむ労働人口にたいして、彼らの状態を改善するために、彼らの人数を自然の法則に反する節欲によって減少させることを忠告するほかには何らの忠告も与える術^{すべ}を知らないのである。

3. 労賃引上げのための国民的救済手段

労賃引上げのために提案される大衆的な救済手段について、ミル氏は次のように言う。「望ましい高さに労賃を維持するために考え出されるもっとも簡単な打開策

は、それを法律によって決定するということである。ある人々は最低限を確定することを提案した。労働者の指導者たちのあいだで多くの賛同を見出した他の一案は、地方的な経営委員会を作り、自然的正義に基づく、そして需要・供給に基づかない賃銀率を決定することであろう。他の人々は、雇用者たちは十分な賃銀を与えるべきであり、もし彼らが進んでそうしないなら、彼らは世論によって強制されるべきである、と信じた。」(同前訳、第2分冊、p.309.)

「大衆的な考え方は、あらゆる貧乏人に就職を世話することは富者あるいは国家の負うべき義務とみなしている。世論の道徳的影響力があらゆる貧乏人に十分な賃銀で就業させるように、富者を動かし、十分に彼らの消費を節約させることに至らないなら、人々はこの目的のために租税を課することは国家の義務であると考え。労働と資本の賃銀基金との関係は、人口の制限によってではなく、資本の増加によって、労働の有利な方法に修正されるであろう。社会にたいするこの要求が生きた世代に制限され、労働者に生きている人を十分な金額によって継続的就業を保障するほかに何も必要でないとするならば、このような提案は私のほかに熱心な擁護者を見出さないであろう。」(同前、pp.312-313.)

「しかし、生産し(?)かつ蓄積した人々が、現在生きているすべての人々だけに食料や衣類を与えているのではなく、これらの人々あるいはその子孫にとって息を吹き返すのによいと思われるすべての人々に与えているとするならば、問題はまったく別である。このような義務が承認され、また実際に行われるなら、あらゆる制限は除去されるであろう。人口が急速に増加する方法を妨げるものは何もなく、またしたがって資本の自然的な増加は以前のように急には行われまいであろうから、増加する不足は新たな租税によって均衡させられなくてはならず、課税はどんどん進んでいくであろう。もちろん扶助に対する交換として労働を強要するための試みがなされるであろう。経験は、公的福祉の受給者からいかなる労働が期待されているかを教えてきた。賃銀が労働にではなく、労働が支払のために与えられているとすれば、何もしないことは良心の問題である。解雇権なしに日雇労働者から現実の労働を強制することは鞭の力によってのみ実行可能である。しかし彼らを活発に働かせたとしても、増加する人口は生産物を比例的には増加させることはできない。すべての人々が食べたあとの余剰は、総生産物に対して、また人口に対して減少す

るであろう。そして、人口は不断の割合で増加し続けるが、他方生産物は通減的な割合でしか増えないので、月日のたつうちには余剰は吸収されつくしてしまうことになるであろう。貧民の救済のための増税はその国の全収入を消尽し、支払人と受取人は一つの群に融合するであろう。死によるかあるいは予防措置による人口の制限は最早猶予できないだけでなく、突然にまた一度に効力を発揮するに違いない。その間に、人間社会をアリ塚あるいはビーバー群落を越えてほめたたえているすべてが没落するかもしれない。」(同前, pp.313-315.)

聖書ではアリは勤勉と予見の母として賞賛されている。近代の文筆界は蜂をその代わりにしている。働き蜂は雄蜂が余計になり、社会の負担になると、これを刺し殺す。アメリカの労働組合は、彼らがよく雄蜂の渾名で呼ぶところのなにも生産しない資本家をして、困った状態に置かれてパンを自らの有用な労働によって稼ぐかあるいは手に入れることができず困苦させることを主要な任務にしている。組合は株仲間から始めることを提案している。

ミル氏はさらに続ける、「われわれは、各人は生存権をもっていることを異論の無いものとみなそう。しかし、いかなる人間も、他人によって扶養されなければならない生き物を生む権利をもってはいない。」(同前, p.315.)

「国家にとって、すでに生れているすべての人に適当な賃銀と引き換えに就業を保障することは可能かもしれない。しかしこのことがなされれば、国家は自衛のために、また政府が存在するところの一般的な目的のために、誰も国家の同意なしに生れる者がいないような措置をとることを義務づけられる。自製の通常の、またおのずと生じる動機が除外されると、他の制限がそれに代わって設けられなければならない。少なくとも若干のドイツ国家にあるところのそれに匹敵する婚姻制限、あるいは子供を養う状態にないのに子供を産む者にたいする重刑が、不可避免的に必要とされるであろう。」(同前, p.316.)

これがあらゆる著名なブルジョア的経済学者のなかのもっとも有名な人の社会哲学の精髓である。資本家的な新聞の讃歌からのみ経済学のミルの原理を知っている読者諸君、諸君はある神聖な熱意に感動し、出かけて行って、腹をすかせた人々に世界救済のこの福音を説教しようとは思わないか。諸君は、1866年の恐慌によって食えなくなっているすべての人々に対して、彼らの両親こそこの災難の責任を負っ

ている、なぜならこれら両親が彼らの生活資料を予め保障することなしに彼らを産んだからであり、また労働者の現役世代は邪悪な犯罪者集団である、なぜなら彼らはマルサスと彼の偉大な予言が人間の幸福の永久的法則を伝道したあとでも犯罪の軌道を歩み続けているからである、これらのことをわからせることを一つの神聖な義務だと思いつかないか。

ミル氏は彼の「国民的救済手段」批判において、1848年の懲役労働と結びついた救貧法を超越することはできない。労役場に入ることなく貧民扶助を許される労働可能な男たちは、日々（厳しさにしたがって）5から6束の舗道石を切り出さなければならないし、労働可能な女たちは5から6ポンドの古い漁網を解きほぐさなければならない。同じような労働は監獄内でも懲役労働として行われるが、違いは、罪人たちのほうが救助を要する正直な労働者よりもましな賄いを受けているということである。労働はミル流の国家失業救済思想の基礎である。彼は資本家の利潤を目的にしない生産的労働など考えることができない。だから国家によって与えられた就業は、救貧労働や収監労働のように、租税を負担する公衆が支弁するところの財政赤字をもたらすにちがいない。イングランドやウェルズにとって救貧労働による財政赤字は1867年には695万9,840ポンド・スターリングに達し、労役場のそとで石を切り出し、漁網を解きほぐす不幸な人々は15万6,984人に達した。労役場のなかでは、60歳以下の夫婦は互いに、また子供たちから引き離される。ミル氏は、労役場の外の一時的な石割工たちにも事実上の離婚を広げることになる。

「労働は富の源泉である」と、ブルジョア的経済学者たちは異口同音に叫んでいる。しかし労働を遂行する労働者は貧民の子供であり、彼らにとってそれは貧困の源泉であり、資本家だけが彼の労働の収益にたいする所有権を持っているのである。その労働が資本家にとって長年にわたり富の源泉として役立ち、彼の労働力によってたくさん生産するところの労働者は、一文の権利ももたない。そして、彼の労働が資本家にとって最早貨殖の源泉として役立たなくなるやいなや、その労働者はその露命をつなぐための公的慈善の対象として扱われ、使用不能になった役畜同様に生活上のいっさいの楽しみを剥奪されることを、ミル氏は要求するのである。

読者諸君、ストックポートの紡績工を思い起こして欲しい。工場主たちが1840年から1843年にかけて手に入れた改良された機械は、800人の紡績工が資本家のため

に毎週22シリングを残したお金で購入されたものである。改良された機械は660人を過剰ならしめ、残った140人に13シリングで働くこと余儀なくさせた。これは、有効な活動能力をもった人口の増大にさいして労働の収益が累進的に減少することの証拠であったか。これは、紡績工が彼の生活、とりわけ人間的に生きるという彼の権利を混乱させたという自然の暗示であったか。いかなる法律書のなかで、資本家的な本性のみがより生産的になった労働の余剰所得への合法的な請求権を持っていると書いてあるのか。その有用な活動能力によって増大した、また増大しつつある人口のための生活資料を呼び起こしたところの労働者が、彼らの幸福に対する自然的権利も、倫理的権利も、いかなる種類の請求権ももっていないのか。あるいは、彼はそれにたいして自然によって、生活資料——人口に比べて社会的富——がより大きくなるのと同じような規模で生存競争をつよくすべきであると宣告されているのか。生涯にわたって働いてきて今日なお窮乏に陥っている家父は、彼がなお昨日まで彼の手労働によって生産した富に他人が沈溺しているのに、重刑を下されるべきではないのか。他人によって扶養されなければならない子供を生んだのは誰か。労働者ではない。彼はただ彼自身の子供たちだけでなく、他の階級の子供たちをも養っているのである。富裕な母親たちはその肉体の果実である自然的母乳すら拒んで、当然の母親の義務を免れる。貧民の娘たちは富者の子供たちに乳を与え、そして面倒をみなければならない。そして労働者階級全体が彼らの食料、被服、住居、教育および享樂のために世話をしなければならない。だからもし刑罰が問題とされるべきであるなら、われわれは揺りかごから墓場まで消費するだけでまったく生産しない富裕な怠け者から始めなければならない。われわれは、上流階級に属する母親たちにその母親の義務を果たさせ、また社会の生活資料を有用な活動によって増やさない父親たちを労役場に入れ、若い無精者の増加を防止することから、手をつけよう。

ミル氏は問う、「貧窮はどのような手段によって克服されうるか。どのようにして低い労賃の弊害を除去しうるか。もし普通に託された統治手段が不適當であるなら、他には考えられえないか。問題は解決不能であるか。経済学は何ごとに対しても異論をさしはさみ、そしてなにもなしえないということ以外に何ごともしないのか。」(同前, p.331.)

「あらゆる経験は、多くの人間は倫理的問題については自分自身では決して判断できないということ、彼らはしばしば言われるまでは、正しいのか間違っているのか、分らないことを教えている。また貧しい人々に、彼らが夫婦的な制約の中に留まっている限り、これらの問題にかんしていったいどのような義務を負っているかということ、誰が言ったか。誰に侮辱されているのか、あるいはむしろ、彼がこのような放縦さのために彼自身と彼に依存する人たちに招いたかもしれない災難にたいして誰に同情と好意をもって遇されないのか。無節制に飲酒に浸る人間が、道徳的な人間と思われないすべての人々によって指弾され、軽蔑されているにもかかわらず、その貧乏人が多くの家族をかかえ、また扶養することのできない状態にあるということを慈善家への要求の主な理由にしうるであろうか。人は、子供たちは結婚した人々に天から直接降ってきたのであり、彼らはそのことになんら関係しておらず、また一般に言われているように、彼らの子供の数を決めるのは神の意志であり、彼ら自身の意志ではない、こういったことを思い込んでいるかもしれない。」(同前, pp.333-334.)

「多くの家族の産出が泥酔やその他の生理的放縦と同じような感情でもって見られている限り、道徳的改善はほとんど期待されえない。」(同前, p.335.)

「これにたいして、あまりに多くの労働者が彼らの貧窮の主要な要因であり、したがってどの労働者も(シスモンディとともに)社会の進歩に合致した子供の数以上の子供を持つ労働者を彼に不公平な行いをする人間と見なしているような思想、つまり彼が持っている持分である職責を果たしている人間を人間と見なす思想が、労働者階級のあいだに一般的に行き渡っていくならばどんなことが起こるか、想像してみよう。そのさい、世論のこのような状態は労働者の行状になんら大きな影響を与えないであろうと信じる者は、人間の本性をまったく知らないに違いないのであり、大部分の人間をして自己の利害に自ら気を配らせるところの動機の大部分が、いかにして彼らが他人の意見に払うところの配慮——可愛がられたり、あるいは憎まれたりすることの予想——から引き出しているかを顧慮することができないのである。」(同前, p.339.)

「もし新たに生まれてくる者が、1人の労働者を押しのけるか、あるいは後進として前に雇われていた労働者の地位を満たすかによってのみ労働を手に入れること

ができることが明白であるとすれば、人は一般に来るべき世代を現役の世代を補填するのに必要なだけの数に制限すべきとの予見と世論の結びついた影響を信用するかもしれない。」

したがってミル氏は、他の階級の労働の果実にたいするある階級の所有が世界の終末まで継続すること、また労働者は犬と同じように食料として彼の主人の食卓から落ちてくるパンくずに甘んじなければならないこと、そしてこのようなパンくずに依存している者の数をできるだけ少なくすること以外には他には余分は残っていないこと、これらのことを運命と見なしているのである。もし人間の本性をさらに引き下げることができ、妊娠した婦人や家父を度し難い大酒のみと同じように侮辱でもって取り扱い、そしてその子供たちを厄介な侵入者として肘鉄砲でもってあしらうことを慣習として身につけるとしたら、それはなんと愉快的な人生であろう。過ちを避けるためには、このような道徳法典をそれ自身のものとするような社会においては、なによりも懲戒警察の許可を得て妊娠する女やこのような許可を得て生まれるであろう子供たちと許可をもたない者たちと容易に識別するための標識によって区別することが必要であろう。若いときに不幸な恋愛問題を持ち、そのほかにも人生経験に間違いを犯した年配の独身者が、倫理学者、治安判事、あるいは立法者としてもっともふさわしい人物として選ばれるかもしれない。このような労働者の楽園を実現する方法として、ミル氏は、突如として第一に、国家の費用で多くの若い農業人口を植民地に移送することを提案する。しかしアイルランドの農業人口の数は突然に3分の1以上も減少したが、あとに残った者の状態は、すでに見たように、目に見えるようには改善されることはなかった。いまだに数千人が食べるものもなく、棲むところもなくイングランド中をさまよい、仕事を探しており、また故郷に残った数千人は、その貧しい存在を石割と漁網解きによって生きながらえることを強いられているのである。

第二の大いなる解決手段は、将来耕作されるかもしれないあらゆる共同所有地を分割地に分け、小土地所有の新たな階級を作ることである。

ファーガス・オコナーの土地計画の失敗以来、労働者は最早鋤によってみずからを解放することを夢想することはない。ミル氏やジョン・ブライトンのような大人物だけが、ブルジョア社会はこのような膏藥によっていくらかの膿を出すことがで

きと思っているのである。なお今日労働者の名において土地問題を論ずる者は、ミル氏とは別の要求を出している。例えば国際労働者協会評議員であるアリフレッド・ウォールトンは、すでに2版を重ねている著書で、いっさいの土地所有は国家所有に転化されるように提案している。1868年11月14日の『ビーハイブ』で、一労働者は、国家は失業している農業労働者を就業させるためにあらゆる未耕地を取得すべきであり、また11月22日の『ヘルマン』誌に反対して、社会主義的方法で取得すべきであると提案している。彼は、国家によって取得される土地が1,000エーカー、500エーカー、あるいは100エーカーの小作地に分割され、協同組合に譲渡されるべきであると提案している。10エーカーごとに1人の組合員が割り当てられるはずであり、経営資本は強制通用力のある国家証券の形態で前貸しされ、また組合から年率で利子と純益の一部を国庫に返済されるべきであると、提案している。スチュアート・ミルの個人的友人で、ある程度はその弟子であるフォーセット教授ですら、協同組合的生産を農業にも可能な限り広げて行くことを主張している。現在貴族たちにただ同然で貸付けられているいわゆる御料地と、すでに数年前から年1,200万ポンド・スターリングにまで下がっている国教会所有地は、労働者階級に彼らの社会的更生という彼らの原則を実際に実現するための機会を与えるであろう。これらの提案について重要なことは、それらの直接的な実際的な実現可能性ではなく、これらに明らかになっているその精神である。「事が起ころうとする前にはその前兆があるもの」というイギリスの諺がある。今日の労働者階級の思想家が理論として説いていることは、近い将来、たとえ他の方法であるとしても、実生活において実現されるであろう。どのようにして今日の土地所有者階級が彼らの議会勢力の助けをもって土地改良法のもとで彼らの土地を改良するとしても、将来においては労働者が協同組合的な生産を促進するために国家信用を手に入れることであろう。

ミル氏がその希望を託している第三の主要な解決方法は、先に述べた強制的な人口制限である。ミル氏は、あらゆる有機体に固有であるあらゆる本能のなかでもっとも克服しがたいものを打ちひしぐことのできるような世論が魔法でもつかってうまくやられうると思い込み、自己満足しているように見える。しかし、彼は労働を心地よいものにするための刺激剤として鞭を必要としている。後者は、現存する諸関係のもとで上流の怠け者が富をもって報いられ、それにたいして労働が窮乏でもっ

て言いくるめられるかぎりにおいて、言い訳をすべきなのかもしれない。人間のうち生活力のある部分は歴史上のいかなる時代においても支配階級の賢げな大法螺吹きのためごとによって惑わされることはなく、生命と進歩の小道を平然と歩いて行くのである。

ミル氏は、労働の生産物が分配される破廉恥な方法に不満を表明し、人口の制限によるよりよい分配を導くことを考える。空しい願望だ！彼は、生きている人口の要求に法律制度を適合させるかわりに、人口をすでに維持できなくなった法律制度に適合させようとするのである。資本とブルジョア的私的所有の支配のもとで、生産力は現在存在する以上の多くの人口を快適な状態で生活できるような状態にまで発展したが、しかしこの同じ所有諸関係は同時に、大多数の人間を労働人口の知性と勤勉の所産への参加から除外するような障壁を建てた。マルサス流の恐怖論が予言するような人口が生活資料を凌駕するのではなく、生活資料が取得と所有関係を凌駕している。資本の支配は、怠惰な少数者にたいして、労働する大多数がほとんど最低限の必要をさえ満たすことができないにもかかわらず、あらゆる種類の奢侈と放逸にふけり、なおかつ富を蓄えることを可能にさせる。労働する人口の人為的な制限は、たとえその実行が可能であるとしても、最高に非人間的な状態を蔓延させる傾向をもつであろう。——これにたいして、窮乏人口のさらなる増加は、彼らを縛り付けている足かせを吹き飛ばし、すべてを飲み込んでしまう食欲がその盾になっている障壁を粉碎するであろう。

ミル氏が労賃引上げの一般的救済手段を列挙するさいに、工場法、労働組合、そして両者によって追及されている労働時間の短縮に一言も言及していないのは不思議である。労働組合が資本家に強制して、未組織労働者が受け取っているよりも高い賃銀を支払わせることは、すでに久しく争う余地のない事実である。例えば、労働組合をつくるにはあまりに偉大な芸術家で、また気高いと思っているとロンドンの時計工たちは、組織された煉瓦積工（煉瓦職人）よりもはるかに高い賃銀で働いている。しかし、組織された業種の労働者は組織されていない労働者のそれよりも高い賃銀を受け取っていたばかりでなく、同業の組織された労働者は未組織の労働者よりも高い賃銀を支払わせている。だから1824年にグラスゴウの一紡績工場主は組合禁止法の撤廃に先立って行われた議会の調査委員会で、彼がよそでは24から25

シリリングで提供されている同じ労働に30シリリング支払うことを余儀なくされているのは、たんにグラスゴウの紡績工が組合をもっており、他のそれはもっていないことによるのであり、しかも彼は他の工場主と同じように、同じ価格で商品売らなければならないと訴えた。

工場法も同じように賃銀引上げに効果をもった。10時間法に規定されるあらゆる業種において、労賃は労働時間短縮にさいし騰貴したが、同時に、他の業種においては労働時間の延長にさいして労賃の低下をともなった。労働日の長さは労賃に対して反比例の関係にある。大工および指物工組合の組合員はハリファクスでは毎週27シリリングで52時間半労働し、ノーヴィックでは24シリリングで59時間半労働し、ペンザンスでは20シリリングに対し63時間であった。アイルランドの首都ダブリンでは26シリリングに対して週63時間労働するが、地方のウォーターフォードでは20シリリングに対して63時間、ベルファストでは30シリリングに対して57時間であった。一般大工組合の多数の支部は、あらたに、1869年春に労働時間の短縮を要求する許可を求めてきた。現在一週52時間しか働いていないある支部は、労働時間を49時間に短縮しようとしている。（許可が必要なのは、いかなる支部も事前の全組合の同意なしには、その要求がストライキに至った場合に、規約上の金銭支援を要求できないからである。）ランカシャーの石工は建築親方協会に1869年5月1日から労働時間を短縮するとの通告を行っている。私はこれらの事例を、わがドイツの労働者諸君に労働組合の一般的努力の指標として役立つかもしれない労働組合（イギリスの労働組合をさす——訳者）の努力にかんする最近の報告から取り上げるのである。

これらは労働者階級が彼らの抑圧された状態の一時的な緩和に利用する便宜的手段である。それらは同時に現存する弊害にたいするミル流の荒治療のアンチテーゼ（反措定）と見なされるべき、労働者階級の法的手段によって実行しうる方策の基礎をなしている。国家が労働人口の過度の搾取に対して干渉するための権利をもっていることの原則に基づいている工場法のなかに、労働者階級はある階級の他の階級による搾取に合法的な方法で対抗するための諸条件を見出すのである。物質的な抑圧の同時的な緩和をとまなう労働時間短縮は、精神的に成長するための性向と能力をもつ労働者階級のあいだに必要な閑暇を与え、そして彼らを以前よりも効果的に運動に参加するための状態におくのである。

ミル氏は休息を望んでいる。彼は彼の諸提案の目標が人間社会の静止であることを隠してはいない。彼は静態的な人口を保障するために人間の生殖本能が十分に抑制され、したがって誰も新参与者によって排除される危険がなくなれば、貧しい人も豊かな人も両者ともに安らかな充足のなかで生きることができると考えたのかもしれない。だから彼は、古典学派の経済学者によって公表されたあからさまな敵意をもって静態的狀態を見ることはしなかった。人間社会の一般的に幸福な状態は、彼の考えでは、停滞的な状態と完全に調和するだけでなく、当然何か他のものと連合しているのと同じようにそれと連合しているように見えるのである。彼はさらに続けて言う、「資本と人口の停滞的な状態は人間の進歩の静止を決して意味していないということに注意する必要はない、云々」(同前訳、第4分冊、p.109)と。

増殖する傾向が必然であれば、人口の停滞的な状態は不自然であるか。停滞的な人口は死と喪失の徴候であり、没落の前兆である。世界史は停滞的な人口をもってある地位を諸民族のもとで確保し、あるいはその内的生活において進歩し続けるということを証明する民族は一つとしてもってはいない。人口の増加はあらゆる人類的進歩の基本的条件である。何らかの歴史的発展のある段階で人口の意図的な制限によってよく知られた生活資料の過剰の危険を永久的に排除することが可能であるとすれば、歴史的発展の必然性そのものも排除されるであろう。石器時代のずるがしこい奴がその時代に現存している生活資料と自然から贈られた石窟を超える人口が増加することを防止しえたとなれば、世界は建築士のものにならなかってであろうし、建築労働者と建設親方との社会的争いも決して起こらなかったであろうし、人間はその兄弟であるサルと同じように地球上のある一定の場所に制限されたことであろう。人口の生活資料に適應するための人間の願望と可能性と能力が人間を人間にしたのであり、生きている世代の可能性と能力、現存する生活資料が増加し、また増え続ける人口の欲望に適應するように配分することが、未来の人間が存在するにちがいを規定するであろう。それは資本と賃労働の限界内では実現されえないことであり、だからこの限界は崩壊せざるをえないのである。いかに労賃が高くなりうるかという問題は、賃労働がいかに廃棄されうるかという問題の解決において解決されるにちがいない。

XV. 結論

われわれはミル氏が他のすべてのブルジョア経済学者と同じように、資本主義的生産様式を正常な人間的な生産様式として取り扱っていること、その動力と作用を購買や販売、支配と従属から独立した純粹に自然的なものとして記述しようとしていること、資本の集積や資本の利潤を、それらがいかに発生するかを考察するかわりに、単純に節制の報酬として説明し、そしてそれから生じるブルジョア的私的所有を神聖なものと宣言していること、これらのことを見てきた。さらにわれわれは、彼が今日の社会の弊害を認めながら、人間の本性に強制を加えること以外にいかなる矯正方法も見いだすことができず、そして他人の不払労働からなる財産の神聖を犯さないために、とりわけ労働者階級が不自然な壊滅方法によって、彼らが私有財産制度という牢獄の内部で社会の隷属させられた土台としてただ生きつづけるほどに人口を制限すべきだと要求していることを見てきた。資本経済の擁護者のなかでもっとも偉大な思想家が、これ以上の人口の増加は神聖な所有関係の存続を脅かすとの結論に達したという事実は、この関係がすでに人類の進歩の障害になっていることを証明している。支配階級の偉人たちがミル氏を「新思想」の天才として世界中に触れ回っているというもう一つの事実は、社会的状態が社会的権力として全階級の言葉では間に合わなくなっていること、未来の社会的進歩の諸条件を手にしている抑圧された階級の要求と欲望が支配階級に恐怖と不安を起こさせていること、またその代弁者たちが最早彼らが管理することができなくなっているものを支えようと努力していること、これらのことを証明している。古代ギリシアがその歴史的使命を果たしてしまったとき、プラトンは当時の状態を結婚の制限と人口増加の阻止によって永久化するように努めた。アリストテレスは彼の例にしたがって、またマルサスやその弟子であるミルのしたように、プラトンの制限理論を自然の永久かつ不変の法則のうえに打ちたてた。大衆はこのような崇高な理論によって、間違っで導かれたりはしなかった。禍福のなかで、幸福と不幸のなかで、今日は楽しく満足して、明日は十字架に、あるいは鎖に、しばしば血まみれの頭をして、大衆は常により高い目的に向かって努力したし、定評のある偉大な天才が追求するものより

もより高い目的を達成した。エジプトや小アジアの反逆者たちはギリシア文明の礎石をなし、ギリシアはエジプトや小アジアを凌駕し、またローマを創設した見取り図を作り出し、ローマはギリシアを凌駕した。ローマが当時知られていた世界を征服したとき、貴族のあいだには結婚することへの躊躇や嫌悪が広がった。大部分がドイツの蛮人の同属であった奴隷は、彼らの主人たちの風習を真似たりはしなかった。ローマ帝国の死の天使である初期のキリスト教徒は、偉大な世界の女主人（クレオパトラのこと？——訳者）の学識を非難した。後のキリスト教徒は科学や学識一般を排撃したが、しかし初期のキリスト教徒が排撃したのは律法学一般ではなく、その宗教と奴隷制度をともなう古代国家で関係をもつかぎりでの科学と律法だけであった。初期のキリスト教の著述家や説教者は、今日われわれが信じ込まされようとしているほどには、学問のない人々であるはずはなかった。彼らが使徒伝や福音書をギリシア語で書いたことは、彼ら自身学問があったという証拠であり、あたかもラテン語が最近までヨーロッパの学問語であったのと同様に、ギリシア語はローマでは学問語であった（キケロは彼の『最高善』をラテン語で書くことに言い訳をしている）。ルターの時代にラテン語で書いた教会改革者は、愚直であったとはいえ、文字を知らないわけではなかった。ローマはその世界征服によって封建国家の基礎を築いていたが、初期のキリスト教徒はドイツの蛮人に封建国家を実現する道を開いたのであった。ドイツの蛮人はローマ帝国を粉碎し、その廃墟から、またその上に封建国家を建てた。封建制度は古代奴隷制よりも高度な文化段階であった。封建国家以前には、より高度な文明の担い手は急に現れた。彼らは、ギリシアやローマにおけるように、それが発生した文明の境界に定着したか、あるいはペルシャ人やドイツ人のように、彼らの活力に満ちた蛮人の血によって新たな生命が衰弱した帝国にもたらした侵入する蛮人たちであった。封建国家は、自分の胎内に彼らの祖先の偉業を粉碎し、その廃墟の上に近代ブルジョア国家を建設したところの革命的階級、つまり近代市民階級を生み出した。その近代国家はふたたびその革命的階級を、すなわちブルジョア国家の諸機構を粉碎し、その廃墟の上に新しい、より高度な社会を建設するのに必要な実行力、手腕、勇気をもっている近代的プロレタリアートを産み出した。中世の諸都市は、田舎の反逆的な過剰人口に封建領主の領主裁判権の及ばない労役場を提供した。その反逆的な農奴の後裔が近代国家の核心を形成

するのである。近代社会の代弁者——エリート、つまり現存する状態の弁護者——は、ギリシアやローマのその前任者と同じように、さらなる人口増加は現存する財産関係を破滅させる恐れがあるという結論に達した。このことは、現存する財産関係が維持できなくなっており、資本の支配の下での社会的進歩が終わっていることの明確な証拠である。ルソー、ヴォルネイ、ミラボー、その他の人々が零落した貴族の要求に対して第三階級のために持ち出した説明や証拠は、今日では、資本家階級に対する労働者のために名前を変えて応用されうる。大資本家たち——そしてとりわけ大資本家が問題であるが——は、産業に寄宿する不労所得者になってしまった。年々数千の収入をもたらすほどの経営の技術にかんする最低の知識をもっているいわゆる経営者、大経営の所有者が今日なおいるであろうか。100人に1人もいないであろう。彼らの経営知識は、多くの場合、収入と支出の差を計算して、生産的な無駄働きの儲けを査定することができるくらいのものである。

われわれは最後にブルジョアジーの発展における主要な契機のいくつかについて考察しよう。征服者のウィリアムが1066年にロンドンでの戦勝入場を行ったとき、ロンドン市民は彼らを特権のある隷属民として生きるかぎりの自由が奪われないことを恩典と見なした。ロンドンを除く十大都市は3,840家族から成っていた。1861年には六つの小さな都市が3,472の住家から成っており、ロンドンを除く十大都市は37万8,160の住家から成っていた。1801年には、この同じ十の都市は221万5,261人の住民を擁しており、1861年には766万7,622人の住民を擁していた。この十都市のなかには一つも征服時代の都市リストにはなかった。1066年に普通の農奴に転化される——それは征服者の権力でどうにでもなった——かわりに、特権のある農奴に留まることを幸運と考えたこれらの都市の市民は、1265年には議会に代表者を送ることを求められるのに十分なだけの勢力であった。100年間、これらの代表者は彼らの租税協賛に嘆願書を添えることで満足していた。1377年に初めて彼らは下院として組織され、討議するための議長を指名した。20年後には、下院の議員はノーフォークとヘレフォードの公爵間の争いを調停するための議会委員会に関与させられた。ヘレフォード公は後の国王ヘンリー四世であった。

440年の長きにわたって、市民階級は頑強に戦い、ついに年々承認される予算によって国王権力を制限することに成功したのである。(1688年の革命以来、初めて

租税は承認されるようになる。) それに続く140年間に新しい社会的勢力、つまり近代的産業ブルジョアジーは、封建的な城壁の外部のいわゆる自由な都市や農村に定住した。

近代的産業はツンフト制度の裁判権に従属していた都市の外部で自生的に発展し、19世紀の大都市の基礎を築いた。このような新しい勢力は議会的範囲の外部にあった。認められるようになるためには、繰り返し闘争が必要であったが、彼らは1832年の改革案によって議会に進出した。1867年の改革案によって、産業ブルジョアジーは国家における統治権を獲得した。600年間、市民階級は闘ってきて、無制限の国家支配権を勝ち取った。プロレタリアートは昨日初めて自覚した勢力として歴史の舞台に登場したのであり、今ではすでに支配階級を不安と恐怖で満たしている。ブルジョアジーは彼らが政治勢力として認められた瞬間から、彼らの特殊利益を国家利益にするために努めてきた。労働者階級はこの実例に従うほかはない。ブルジョアジーは王制と土地貴族階級に最終的に勝利するために600年を必要としたが、プロレタリアートは同じようにその政治的支配を数十年で戦いとるであろう。はじめて社会主義的共産主義的教義として現れたところのプロレタリアートの社会改革は、20年前にはなおあらゆる文明を片付ける闇の怪物と見なされた。今日ではすでに、最近世代の社会主義的共産主義的理論の実践的な表現にすぎないところの協同組合運動は、反動家によってすら労働問題の望ましい平和的な解決手段と見なされており、まもなく協同組合的生産は不可避なものになるであろう。

プロレタリアートがその政治的力を拡大するのに比例して、国家権力を使って協同組合的生産を拡大することになるであろう。今日の協同組合は、ちょうど古代ローマや中世時代初期のツンフトが不可避免的に奴隸的な性格をもっていたように、資本と賃労働に立脚する生産を特徴づけているなにかを不可避免的にもっている。私は今日の協同組合的努力を、それが現実的に実現される限り、古代ローマのツンフトと同じように、将来の先駆者として、将来の社会的関係の顕示として見なしている。ローマのツンフト、そして封建国家初期の特権を認められた農奴とハンザ同盟との関係のように、将来の協同組合的生産にたいする今日の生産協同組合の関係はなるであろう。あまりに気分にとらわれ過ぎる有名な文豪ラスキンは、最近ある労働者から協同組合的労働にかんして質問された。彼はフレーザーの『マガジン』誌上で、

自分は協同組合的労働はだいたいにおいて社会革命を含意しているとの推測を抱いているが、これは今後自らの研究対象にするつもりの問題であり、なんら明確に答えることができないと回答している。私はこの問題を数年来の研究対象としており、私は裁縫労働の合間の閑暇を利用して、私が属している被抑圧階級の要求を口頭や書き物で代弁し、弁護してきたが、次のような結論に達した。つまり、ラスキンが予知した社会革命は現存する弊害にたいする唯一の現実的救済手段であり、その実現は不可避である、と。また、次のような結論にも達した。つまり、すでに寿命を終えた社会的関係が解体されて新しいものが形成されてきており、あらゆるこれまでの歴史時代におけると同じように、今日ふたたび教養のない大衆が、より高い人間的文化の胚芽をその胎内に蔵している、と。しかし、この大衆の要求に承認と合法的効力を得させるためには、とりわけ大衆の中で知的才能をもち、またどうにかして教養を積む機会をもつ人々が、彼らの階級の欲求を弁護することを一生の仕事とすることは必要不可欠なことである。労働者階級の知的な大人物が彼らの歴史的使命に値するようになればなるほど、現存する所有関係の維持しがたいことを承認する支配階級の知的な大人物も被抑圧階級のために尽力するようになるであろう。しかし、新しい事態の代弁者が現状の弁護者の知的大人物にたいして精神的な優越性を効果ある活動によって実証するとき、その時はじめて教養のない大衆はより高い人間的完成にむかって邁進するのである。